
狼の恩返し

kuro

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

狼の恩返し

【Nコード】

N6598P

【作者名】

k u r o

【あらすじ】

昔、自分の怪我を治してくれた少女。

その少女に受けた恩を返すためにガルーは一族をぬけ出す。

そして、ガルーは王都で少女を見つける。

ガラの悪い主人公が、昔の恩人に不器用にも恩返しをしようと頑張る話です。

旅立ち（前書き）

リハビリがてらに書いたものです。

基本的に作者の好きなことを好きなように書きます。

自分に合わないと思ったらすぐに戻るボタンをどうぞ。

旅立ち

ザザッ ザザッ

深い森の中、何かが草を掻き分け走る音が聞こえる。

ザンッ

そして、その音は何かが森を抜けた事で聞こえなくなった。

変わりに聞こえてくるのは人の話し声。

声からしてまだ若い二人の男の声だ。

「…ここまで来ればさすがに大丈夫だろ。」

そう言って一人目の男が今抜けた深い森を見ながら言った。

その男は全身黒ずくめの服を着た黒髪黒瞳の若い青年だった。

黒でないところは、肌と青年の髪を馬の尻尾のようにまとめている
白い紐ぐらい。

青年は野生的な顔つきとその格好のせいでまるで盗賊のように見えた。

そして、もう一人の男がその黒ずくめの青年に声をかけた。

「いいのですか？ 長年すんでいた集落をこんな方法で抜けて」

黒ずくめの青年に対して、二人目の男が澄んだ美しい声でそういった。

その男の風貌はさきほどの声の主にふさわしく、スラリと背の高い銀髪の青年だった。

まるで女のようにきめ細かく白い肌、細身で均整のとれた体。

そして、その顔はまるで一流の職人が手がけた人形や彫像のように驚くほど整っている。

黒ずくめの青年と同じようにこちらにも黒い服を着ているのだが、こちらはこういうわけだかまるで礼服を着た貴族のように見える。

「……………」

その姿をあらためて見た黒ずくめの青年は、銀髪の青年の言葉に憮然として答えない。

そんな黒ずくめの青年の反応に銀髪の青年は苦笑い。

「おやおや、どうしましたガル？ そんな苦虫を噛み潰した顔をしては悪人顔がさらに凶悪になりますよ」

そして銀髪の青年は、黒ずくめの青年に対してかなり傷つく事を苦笑いしながら言った。

それに対して、黒ずくめの青年は銀髪の青年が言ったように苦虫を噛み潰したような顔で銀髪の青年を睨んだ。

「…なあルース、お前はついてくる必要ないだろ？ 自分の領地に帰れよ」

「嫌です。面白そうなのでついていきます。」

「…めんどくせえ奴だなホント」

「まあまあ、そんな嫌そうな顔をなさらずに。こう見えて私結構役に立ちますよ？ 領地の人間とは仲良く交流しているので、人間社会の常識や知識も豊富です。…それに」

「あん？」

なにやらルースと呼ばれた銀髪の青年が自分の懐からガサガサと何かを取り出した。

「ほら見てくださいよコレを」

そう言って懐から出したのは指輪や大粒の真珠に宝石。

それを見たガルーと呼ばれた黒ずくめの青年は少し呆れた。

「おいおい、手癖の悪い奴だな。城から盗んできたのか」

「失敬な！ これは随分と昔に女性達に送られた貢物の一部です！」

それに対して銀髪の青年は少し怒る。

どうやらネコババしてきたと思われたのが気に食わなかったらしい。

「あー、はいはい。俺が悪かったよ」

ガルーと呼ばれた青年はそう言って投げやりに銀髪青年を宥める。

「わかればいいのです。わかれば」

「ところでそれをどうするつもりだ」

「街で換金します。」

「…そうかよ」

悪びれもせずになんと言う目の前の銀髪の青年にげんなりするガルー。

しかし、いつまでも森の出口でこんな事をしているわけにも行かないので、少しずつ歩き始めるガルー。

それに並ぶようにして歩くルース。

ルースは歩きながら横にならぶガルーに声をかける。

「もう行くのですか？」

「……………」

「せめて一言ぐらい声をかけてあげれば良いではないですか」

「……………」

「…なぜ何も言わずに出て行くのですか？」

「……………」ピタリ。

そこでガルーは一度足を止めた。同時にルースも足を止め、ガルーのほうを見る。

「……………」

「……………」

ガシガシと自分の髪を掻きながら横にならぶルースを睨みつけるガルー。

「なんですガルー？」

「…お前わかってるのか？ 集落をぬけるんだぞ？」

「そうですね。何も言わずに、しかも族長候補にもかかわらず」

「……………」

「しかも、名誉あるウルフヘジンの一員なのに」

まるで非難するような言葉をガルーに投げかけるルース。

「……………」

ルースの言葉を聞きながらガルーは、顔を横に向けルースには表情が見えないようにする。

「…まさかそれが後ろめたくて別れの言葉も言わずに集落をぬけたわけではないですよね？」

その様子を見てカンの良いルースは核心をつく。

「…だったらわりいかよ」

その時だけチラッとだけ顔を向いて、でもすぐそっぽを向くガルー。それを見て少しばかり驚くルース。普段の彼には珍しく若干動揺している。

「…いえまさかそんな事を気にしているとは思ってもみなかったの。私は貴方をもっと凶太い神経の人だと思ってました」

「…うつせえよ」

ガシツガシツ

ガルーは呟くようにそう言ってから、靴底で地面をこするようにして再び歩き始めた。

「……………」

その様子に苦笑してから小走りについていくルース。

——こうして二人の青年の旅が始まった。

「それで？ 表向きは貴方が反発して集落をぬけた事にしてますが、本当のところはどうなのですか？」

再び並ぶようにして歩きながらこの旅のきっかけを聞くルース。

「ああ？ 別にお前には関係ないだろ」

対して、ガルーは勝手について来た旅の相方に冷たく当たる。

「いいじゃないですか。しばらくは一緒に行動するんですし」

「頼んでねえ。帰れ田舎に」

「教えてくれたら街で上等の骨付き肉をおごりますよ？」

「…ゴクリ」

その魔法の言葉に生唾を飲み込むガルー。

「……………」

それをニコニコしながら見つめるルース。

しばらく無言のやり取りが続き、ガルーが再度生唾を飲み事で話は続いた。

「…し、仕方ねえな。教えてやるよ!」

「はいっ!」

口元をふきながらそう叫ぶガルーに笑顔で答えるルース。

だが、

「俺が集落をぬけた理由は、人探しだ」

「はい?」

ガルーの口からでた意外な一言に、ルースの笑顔が崩れた。

「人探しだ。ガキの頃に怪我をしてた俺を手当てしてくれた奴を探す」

「えっと? それだけですか?」

「ああ」

あっさりと首を縦に振った目の前の青年に、若干ルースの口元が引きつる。

厳格な集落を何も言わず抜け、次の族長や名誉ある職も放棄して、やる事が『人探し』

「えっと、そんな事で集落をぬけたのですか?」

「ああ」

「次の族長候補だったのに？ 名誉あるウルフヘジンの一員だったのに？」

「そーだよ」

「…マジですか？」

完全に呆れているルースの顔を見て、ガルーは少しバツが悪くなった。

「…仕方ないだろ。手がかりが殆どないせいで、どれだけ時間がかかるか分からなかったんだから…」

ガルーは言い訳のような事を言って弁明する。

（おや、意外です。てっきり怒られるかと思ったのですが）

ガルーの様子に少し考えを改めるルース。

目の前の青年の口調には普段のふてぶてしい態度がなく、心なし肩を落としているように見える。

これは少し言い過ぎたと反省し、詳しい話を聞こうと探りを入れた。

「ところで手がかりがないとはどういう事なのですか？ 貴方なら鼻で――」

「…さっきも言ったけど、随分昔で匂いをよく覚えてない。なにしろ俺が五つぐらいだったからな」

「…なるほど」

それほど昔のことなら忘れていても仕方がない。

「…ですがそれだと手がかりは、ほぼないのでは？」

ルースはそう言って隣の友人を横目でチラリと盗み見た。

肩でも落としているだろうと思ったが、そうでもなかった。

「いや、実は匂い意外でしっかりと覚えている事がある。」

すっかりいつもどおりのふてぶてしい彼に戻っている。

「ほう。なんですか？」

ルースはそれにホッとしながら相槌をうった。

「そいつは馬車に乗っていた」

「ふむ」

馬車に乗っていた、それなら貴族か商人の可能性がある。

「しかも、かなり豪華な奴だ」

「ふむ」

どうやら貴族の線が強くなった。

「馬車には家紋がついてた」

「おお！」

そこまで聞いてルースは驚く。意外にも確かな手がかりだ。

家紋をつけた馬車に乗るなど貴族しかない。

しかも、家紋は貴族の身分や家名がはっきりと分かる確かなもの。

「手がかりがあるじゃないですか！ 家紋を覚えているならその貴族の名前を知っているも同然ですよ！」

「……。」

喜ぶルースとは違いガルーの表情は暗い。しかも、笑顔のルースの顔を見ないように横を向いている。

「それで？ 一体どんな家紋だったのですか？」

「……いい」

ルースが笑顔でそう聞くと、ガルーは呟くような事で答えた。

「え？ 良く聞こえなかったのですが……」

「……覚えてない」

「はい？」

意外な一言に固まるルース。

「だから、覚えてない。もう一度見れば思い出すかもしれないけど、何せ五つの頃の記憶だしな、…曖昧すぎる」

「…………。」

「一応、相手の髪と目の色だけはしっかりと覚えているから。後はそれを頼りに、王都にいる貴族を虱潰しに探すつもりだ」

「…………。」

絶句しているルース。

「…言っただろう？ どれほど時間がかかるかわからないって」

そう言ってガルは固まったままのルースの肩を引っ張りながら歩き出した。

旅立ち（後書き）

なんとなく思いつきで書きました。

ある程度は急いで書いていき、徐々に更新が鈍足になると思います。

食堂での会話

王都から少し離れた場所にある街。

街の名はアガスト。

そこのとある食堂に二人の若い男が入ってきた。

一人は目つきの悪いチンピラのような青年。

もう一人は作り物の人形のように整った容姿の美青年。

先に店内にいた人間は、そのチンピラと美青年の奇妙な組み合わせに驚いた。

だが、店員はさすがはというべきか、すぐに入ってきた二人の青年を空いている席に案内する。

「ご、ご注文はお決まりですか？」

少し動揺しているのかどもる店員の若い娘。

だが、それを気にしないチンピラ風の青年。さつさと品書きを読んで注文をする。

「あー、一角羊の肉を骨付きでくれ。それを五人前。んで、お前はなんにするんだルース？」

チンピラ風の青年は大食漢なのか、かなりの骨付き肉を注文した。しかも、品書きと一緒にきた美青年に渡した事から、どうやら五人前を一人で食べるつもりらしい。

「私はこの川魚とキノコの香草蒸し焼きをください。ああ、私は一人前でいいです」

そして、その事に全く気にせず自分の注文をする美青年。こちらは細身の体どおりあっさりとした料理を頼んだ。

「は、はい、角羊の骨付き肉を五人前と、川魚とキノコの香草蒸し焼きを一人前でですね？ 後、お飲み物はなんになさいますか？」

この奇妙な二人の青年に対し、マニュアル通りの対応で仕事をこなす店員の娘。

「俺は水でいいや」

「私は石榴酒ざいりゅうをください」

その甲斐あってか、特に問題もなく注文をとり終わる。

「はい、かしこまりました。少々お待ちください」

そして、お決まりの文句を言ってから、小走りで厨房に向かう娘。

それを二人の青年は見送ってから、青年達はこれからの話を始めた。

店員が料理を運んでくるまで、これからの事を確認する二人。

「手がかりが貴族の人間という事で、我々は人間の貴族が多く住んでいる王都に向かっているわけですね？」

「そういう事だ」

「かなり大雑把な人探しですねえ」

「仕方ねえだろ。手がかりが殆どねえんだから」

めんどくさそうにガルーはそう言って、背もたれのついた椅子にドツと体重を預けた。

集落をぬけてから数日、ずっと歩き通しだったので体力に自信ある彼も少し疲れたらしい。

「…違和感があるのですが。めんどくさがり屋の貴方が、何故こんなにも熱心なのですか？」

ガルーの様子をみたルースは、心底不思議そうに向かいの椅子に座る彼にそう質問した。

ルースが知っている彼はもう少し自堕落的だったはずだ。

間違っても「人探し」なんて時間と労力を大量に使う事などしない。

なのに、そんな彼が進んで「人探し」なんて事をしようとしている。

これはもしかすると、まだ彼は自分にこの旅を始めたきっかけについて重要な事を言っていない可能性がある。

ルースはそう考え、追い討ちをかけるようにさらに質問した。

「…もしかして、なにか深いわけでもありますか？」

すると、

「…前にも言ったが、ガキの頃に怪我を治してくれたからだ」

台詞は前に聞いた通りだったが、案の定、すこし目が泳いだ。

間違いない。彼は何か重要な話を話していない。

しかし、おかしい。

ただの人探しで、何を隠すような事があるのか？

（もしかして、探している人物に秘密が？）

ルースは考えを整理しようと、頭の中でガルーから聞いていた探しの情報を整理する。

（ええっと、家紋付きの馬車に乗った人間で、小さい頃に怪我をしたガルーを手当てした人物。そして、髪と瞳の色が――あれ？）

そう言えば、髪と瞳の色を聞いていなかった。その前に少し衝撃的な事があったので思考が停止して、詳しく聞くのを忘れていた。

（ああ、そう言えば性別も聞いていませんでしたね。――ん？）

そこで違和感。いや、ひらめき。

（もしかして、このガルーが探している人間って…）

チラッとガルーのほうを見ると、こちらを見ないように必死にそっぽを向いている。

（ああ、なるほど。そういう事ですか）

その様子と、これまでの行動に、ルースはガルーの隠している事がわかった。

「…ガルー」

「あ？」

なので、ルースはガルーをとろける様な笑みを浮かべながら声をかけた。

「私、安心しました」

「はあ？ 意味がわかんねえけど？」

いきなり、極上の笑みを浮かべて話しかけてきたルースにガルーは気味が悪そうだった。

だが、そんなガルーの様子にお構いなしな様子のルース。ますます笑顔になる。

「私も、そして私の兄妹も心配していました。いえ、きっと貴方の集落の方々もそうでしょう」

「……？」

笑顔で話すルースと対照的に徐々に顔を歪めるガル―。彼は目の前の優男が突然なにを言い出しているのかと訳が分からない様子だ。

「ですが、それもいらぬ心配だった様ですね。成る程、そういう事だったのですか」

「……………」

「ずっと、不思議でした。貴方が女性に興味を示さないの事が。ですが、これで納得しました」

「……………なにが？」

そこでやっとガル―はルースに声をかけた。

すると、ルースは極上の笑みで言った。

「どんな方なのですか？」

「……………っ。」

そのルースの満面の笑みに対して、ガル―は頬を引き攣らせて渋面をつくった。

そして、

「…ちつくしょう。気づきやがったのか」

完全にふてくされた顔でルースを睨んだガル―。

「ふっふふ。当たり前でしょう。何年の付き合いだと思っているのです」

それに対して黒い笑顔を浮かべたルース。

「……………」

「……………」

しばらく、沈黙が続いた後。

ガル―は根負けして、語りだした。

「…ああ、そうだよ。お前の考えている通りだよ」

「…では、やはり？」

そこで完全にやけっぱちになったガル―は言った。

絶対に、目の前の優男には言いたくなかったことを。

「…そうだよ。ガキの頃の俺の怪我を手当てしてくれたのは、『女だ』」

食堂での会話（後書き）

次、過去の話の予定です。

過去

ガキの頃の俺は「やんちゃ坊主」だった。

よく親達に黙って集落から抜け出し、野山を駆け回った。

そのたびに親や知り合いから説教をされたが、懲りずに何度も抜け出した。

なんというか、あの頃は退屈な集落の生活に飽きていたのだ。特に同年代の子どもが集落にいなかった事が主な原因だと思う。

俺は退屈な集落を脱走しては、近くの川で魚を取ったり木の実を食べていたりした。

そんな頃だった、俺が「アイツ」に会ったのは。

きつかけは最低な状況から始まった。

幼かった俺は、はしゃいで野山を駆け回っていた時、運悪くハンターが仕掛けた罠に嵌った。

それは大型の獣を捕まえる為に仕掛けたトラップで、「落とし穴」といわれるもの。

本来ならば、大型の獣の身動きを取れなくするだけのものだろうが、幼い俺には奈落の穴となった。

不意におとずれた浮遊感。そして、激痛。

俺は完全に罠に嵌った。

不幸な事に、完全な不意打ちに受身などれなかった俺は、全身をしこたま穴の底に打ちつけた。

俺はしばらく、全身を襲った激痛と落とし穴に嵌った事に軽く呆然としていた。

何度か痛む体に鞭打って穴をよじ登ったが、小さな体では無理だったようで、ただ体力をすり減らしていった。

これからどうしようと徐々に焦りだした頃、穴の外から声が聞こえ始めた。

「いま、こっちでおとがしたの！ きつとどうぶつだわ！」 「本当ですか？ この辺は昼間に動く獣はいないはずなのですが…」 「ぜったいしたわ！ だってこえが聞こえたもの！」 「ふむ、お嬢様がそう言うならば、そうかもしれませんね。ですが、危険な獣かも知れませんかから私の後ろに隠れていてくださいね？」 「うん！

わかったわ!」

声は大人の男らしき野太い声と、甲高い少女の声。

足音が二つ、徐々にこちらに向かってくる。

そして、その足音の主達は俺が落ちた穴の近くまでやってきた。

そして、

「たいへん! どうぶつがおちてるわ!」 「どうやらそのようですな、暗くてよく見えませんがまだ子どものようです」 「ちいさいから、穴からでれないみたいだわ…」 「ハンターの回収し忘れたトラップに運悪く落ちてしまったのでしょう」 「かわいそう…」 「ふむ、でしたらお嬢様…」

男と少女が穴の傍でなにやら話していた。

だが、俺はその時何度も脱出を試みて体力が減っていて、完全にグロッキー状態。

俺はその声の主達に、威嚇の声を上げる事はできなかった。

このまま、身動きが取れないのだと襲われる可能性がある。

なんとか立ち上がろうとするが、足が言う事をきかない。

「まずい、まずい」と内心かなり焦っていると、穴の外からまた話し声が聞こえた。今度は少し大きな声だった。

「お、お嬢様！ それは私が…！」 「だいじょうぶ！ わたしじょうぶだから！」 「お、お嬢さま」 「えいっ！」

そして、甲高い少女の掛け声が聞こえた後、俺の落ちた穴の底に、突然来訪者がやってきた。

「!!」

俺はその事に全身の毛を逆立てた。

そして低く唸って、威嚇した。

だが、

「あっ！ あなた、けがしてる！」

「!!」

俺の威嚇など殆ど無視して、俺に急接近した来訪者。

「だいじょうぶ？　いたくない？」

「……………」

俺はじりじりと少女から距離を置こうとするが、狭い穴の中なのですぐに追い詰められた。

「えっと、わたしあやしくないよ？」

「……………」

「あなたを手当てしたいだけなの」

「……………」

「だから、ちょっとだけからだをさわれさせてくれる？」

「……………」

俺の警戒心を解こうとしているのか、必死に俺を宥めようとしている。

だが、なかなか警戒を解こうとしない俺業を煮やした少女は、突然。

「えいっ！」

「!!」

俺に覆いかぶさるようにして俺をその小さな体で抱きしめたきた。

憔悴しきっていた俺はそれをかわす事も出来なかった。

気がつけば、まるでぬいぐるみのような状態で抱っこされていた。

そして、

「…いっぱい血がでてる。いたかったでしょう？」

「…………。」

抱っこされた状態で体のあちこちを触られて怪我の様子を調べられ、

「でも、すぐなおしてあげるからね？」

「…………。」

「あのね、外にね、ギリーっと言う人がいるの。すっごく森に詳しい人で薬草とか沢山もってるの」

「…………。」

「すぐ呼ぶからまってってね？」

「…………。」

「ギリー！ この子してるみたい！　すぐ助けてー」

穴の外に向かって誰かを呼んだ。

すると、穴の外からひょっこりと顔を出したのは、髭を生やした嚴
つい顔の男。

「…自分では出られないのに、良く進んで穴から飛び込んで行きましたな」

「えへへっ」

「…褒めてませんが、お嬢様」

そう言って髭の男はため息をついた後、少女に手を伸ばして、俺を
抱きかかえた少女をそのまま穴の外に出した。

そして、穴の外に出た俺は、少女に抱っこされたままギリーと呼ば
れた髭男に怪我の手当てをされた。

髭男が、俺の体中の擦り傷にすりつぶした薬草を塗る。

これがかかなり沁みる奴で、俺は俺を抱っこする少女の胸の中で暴れまくった。

これには薬を塗っていた髭男が参って役を交代した。

つまり、俺は髭男にだっこされて、少女に薬草を塗られた。

少女はなにがうれしいのか、鼻歌を歌いながら薬を塗っていたが、対して俺は最悪だった。

時折、薬を塗る手が滑って傷口に指先が当たってかなり痛い。これならおとなしく髭男に薬を塗っておけばよかった。

最後に包帯を巻かれ治療が終わると、少女と髭男は俺から離れた。

「…できれば、あなたをおうちに連れて行きたいけど。…それはだめなの」

「……………」

「ごめんね…。できれば、あなたのけがをもっとしっかり治してあげたいんだけど」

「…お嬢様」

「ごめんね…」

俺に向かって謝る少女。

俺はその意味がわからなかった。

俺はお前達に助けられた。それなのに、なぜ謝る。

謝るのは俺のほうだ。

俺は怪我の治療中に暴れてお前の手に引っかき傷を作った。他にも最初にお前に唸って威嚇したりもした。綺麗なドレスに土汚れをつけた。

「……………」

俺はその事を言おうとしたが、「この姿」では驚かせるか、怯えさせるだけだと思って何もしゃべらなかった。

そして、何も言わない俺に向かって少女は小さく手を振った。

「じゃあね。バイバイ」

「…達者でな、ちっこいの」

そして、髭男がどこから引いてきたでかい馬車に少女は乗った。

馬車に乗っても、窓から手を振って別れを惜しむ少女。

「…………。」

俺は声を出さない代わりに、体の一部を必死に振った。

「あはっ！」

それを見て、少女は笑った。

笑えば、その容姿とあいまって、とてもかわいかった。

俺はその顔をずっと忘れない。

何年たっても、記憶が曖昧になろうと。

絶対に忘れない。

赤い髪に、翡翠の瞳を持った心やさしい少女。

その笑顔を。

「俺は絶対に忘れなかった」

過去（後書き）

書くのが楽しくなってきた。ノリが違います。

連投できそうなくらい楽しい。

行き詰った別作品とは大違い。

不器用な青年

「俺は絶対に忘れなかった」

そう言ってガルーは言葉をきった。

すでに私達のテーブルには料理が運ばれているのだが私もガルーも料理に手を付けていない。

それは、ガルーの話がとても食事をしながら聞けるものではなかったからだ。

話を簡単に纏めてしまえば、子どもの頃に罠に引っかかったのを助けてもらい手当してもらっただけの話だ。

だが、ガルーの一族の事を考えると少し複雑だ。

ガルーの一族は特殊で恩や義理をととても大切にするのだ。

例え、当事者が大した事をしたと思っていなくても、「彼ら」は必ず恩義を返す。

目の前の彼は、一族の中でも変わり者だと言われているが、そこらへんは他の者達と変わらないようだ。

これはすばらしい事だと私は思う。彼の美点がまた一つ見つかった。

…だが、そんな事よりも、

「…つまりこういう事ですね？」

「ああ？」

私はガルーが怪訝な顔をするのを見ながら、真剣な顔でいった。

「―その時見た少女の笑顔が忘れられないほど可愛いから、もう一度会いたい、と」

「ぶっとばすぞお前」

…しまった目が本気だ。

「んん！ 失礼しました。えーっと、つまりは子どもの頃の恩をその二人に返したいのですよね？」

私は気を取り直してガルーにこの旅の目的を確認した。

するとガル―は少しふてくされながらも「そーだよ」と言って、テーブルの上にあった骨付きを一つとってかぶり付いた。

鋭い犬歯で骨についた肉を剥ぎ取って咀嚼していくガル―。

たった数秒で骨付き肉はただの骨になった。

「そうだ。当時は俺もガキで恩を返そうにも力が足りなかったが、今は違う」

「ふむ。そうですね」

確かに子ども頃とは違い、今の彼なら恩返しに必要な力を持っている。

しかし、それならばもう少し以前に人探しをしていても良かったはずだ。それこそ自由な十代の頃にも。

なぜ、そろそろ次の族長を決めるこの時期に、こんな事をするのか分からない。彼はその族長の候補に名前が上がっていたはずなのに。

そこまで考えて、私は気がついた。

（…ああ、そういう事ですか）

私はやっと気がついた。彼がなぜ一族で族長を決めるこの重要な時に集落を飛び出したのかを

（自信がついたって事ですか…）

名誉あるウルフヘジンの一員になり、族長候補にも名があがった。

ガル―は今の自分なら恩が返せると思ったのだろう。

だから、集落を飛び出した。

血の滲む努力をしてついた力を

戦士として使うのではなく

族長になるために使うのでもなく

恩を返すためだけに使うため、集落を出た。

私はその事に思わず笑ってしまふ。

「ははっ」

「あ？　なに笑ってんだよ」

当然笑いだした私を不思議そうにみるガル。すでにテーブルの上の骨付き肉は半分以上が骨だけになっている。

私はその様子にさらに笑顔になってしまう。

「いいえ、なんでもありませんよ」

「…突然笑い出したてなんでもないとか、気になるだろ」

「いや、本当になんでも—」

「気になるから言え」

どうやら彼のスイッチを押してしまったようだ。仕方ない、後で怒られるのを覚悟で言おう。

「ええ、でしたらいいでしょう」

「おう、早く言え」

私はそこで一度彼の事を見た。

「……………」

ぶっきら棒で、すぐ機嫌がわるくなる、チンピラのような青年。

でも、私は知っている。

貴方が本当はどんな人なのか

不器用なガル―

貴方は本当に優しい青年だ。

「∴私が笑ったのは」

そんな貴方の友人だという事が、

―私は、とても嬉しい。

不器用な青年（後書き）

バトルっぽいこと書きたい。後くらい話。すごく書きたい。

道中

俺達二人は昼食をすませ、街で旅に必要な保存食などを買った後、さっさとアガストの街を出た。

王都まではあと数日は歩き続けなければならない。幸い、天候が安定している今ならば距離が稼げる。

：一応、王都まで人を運んでくれる大型の馬車ならアガストの街にもあったのだが、俺達は乗らなかった。

いや、正確には乗ることが出来ないのだ。

理由は、俺とルースは馬と相性がよくないから。

俺は馬に怯えられ、ルースは馬を弱らせる。

詳細は面倒なので言わないが、つまりそういうことだ。

下手をすると乗っている馬を道中で使い物にならなくさせてしまう。

そうすると、俺達はともかく他の乗客や御者が困る。

だから、馬車に乗るのはやめて徒歩で王都に向かっていくのだ。

二人とも体力には自信があるので、ぐんぐんと王都への道を進んでいった。

しかし、王都までの道とは随分と危険が多いようで、野生の獣やモ

ンスターによく遭遇した。

まあ、その殆どは俺達の胃に大人しく収まったのだが、中には煮ても焼いても食えない奴はいる。

例えば、俺達二人の前に突然やってきた「アレ」とかだ。

「おい！ その男二人っ！ 今すぐ有り金を全部寄越せ！」

「……………」 「……………」

俺達は周りを取り囲む「そいつら」を見た。

ズタボロの服に、使い込まれた刃物、人相のよくない顔。

そんな奴らが十数人ほどで俺達を囲んでいた。

俺は先ほどの台詞と、目の前の奴らの服装を見て確信した。

「ああ、山賊か」

俺がのんびりとそう言うと、隣にいたルースが俺にこうやってきた。

「いや、待ってくださいルース。山賊は山道で遭遇するものです。ですから、きっと彼らは盗賊でしょう」

確かにルースが言うとおりに山は見えない。それにここは街道。

だが、

「おいおい、あんな奴らが人から者を盗めるような高等テクを持っているとは思えないぞ？」

俺が目の前を取り囲む山賊風の男を数人指差していった。

そいつらはいかにも頭が鈍そうだった。そんな奴らが、人の財布の抜き取りや空き巣狙いが出来るとは俺は思えない。

俺がそうやって反論すると、ルースが少し首を傾げて山賊風の奴らを見た。

「ふむ。確かに『鈍そうで』『おつむが弱そう』ですね」

「だろ？」

俺の反論に、ルースは少し悩み始めた。

「うーん？ 確かこういった人たちの職業でぴったりのがあったよ
うな…」

「あー、俺もそれは思った」

「なんて言うんでしたっけ？」

「忘れた」

「仕方ありません。道中で思い出すとしましょう」

「そうだな。いい暇つぶしになるだろ」

俺とルースがそうやってのんびり会話をしていると、当然山賊風の
男達が騒ぎ出した。

「手前らっ！！ 自分の立場分かってんのか！！」 「ふざけやがっ
て！！」 「身包み全部はいじまえっ！」 「剥いで奴隷商に売っちま
おう！」 「そうだ！」 「それがいい！」 「片方は変態貴族に高く売
れそうだ」 「そうだそうだ」

なんだか物騒な台詞が聞こえてくる。

「ーおい、ルース」

「はい？」

「あいつらなんで怒ってんだ？」

「さあ？」

山賊風の奴らがいきなり怒り始めたので、訳が分からずルースに聞くと、こいつも理由が分からないようだった。

「まあ、いい暇つぶしになるか」

俺はそう言って肩に背負った荷物を置いた。

そして、首や肩、それに指の骨をボキボキ鳴らす。

その様子を見ていた山賊風の奴らは各々の武器を取って戦闘態勢をとる。

山賊風の奴らの武器は、殆どが鉋や棍棒だが、中にはメイジスタッフを持った魔術師っぽい奴や、小型の弓を持っている奴もいた。

対して俺は武器なし。ルースにいたっては戦う気がないようで欠伸をしている。

どうやら俺だけがこいつらとやるようだ。

…まあ、いいストレス解消になるだろう。

俺がそうやって少しボーっとしていると、小型の弓を持っていた奴が俺に向けて矢をうってきた。

「おおっ！」

俺はそれを半歩引いてかわす。

「らぁっ！！」

するとかわしたと同時に、山賊風の男が鉈を持って俺に突撃してきた。

俺はそいつに向かってテキトーに拳を振った。

「ぐえっ！？」

鉈が届くよりも先に俺の拳がそいつに顔面に届いた。

「おっと」

グイッ

俺はのけぞって倒れそうになる鈍男の襟を掴んだ。

弓は後々めんどくさい。

なので、矢をうってきた奴に向かって俺は鈍男を思いっきりぶん投げた。

「当たったっれっ!!」

「ぎゃーーーーー!!!!」

ズドン!!

「「ぐええっ!?!」」

まるで砲弾のようなスピードで人間が飛び、そのまま鈍男の頭突きを腹にくらった弓男と鈍男は気を失った。

「おお、当たった当たった」

「「……………」」

俺は見事命中した事に喜び、次の標的を選ぶ。

「うーん、次は少し重い奴がいいな。あんまり軽すぎると飛びすぎてどこ飛んでくかわからん」

「「!？」」

俺はテキトーに体の大きそうな奴に狙いを定め、そいつに向かっていく。

だが、

カッカッカッカッ

ササッササッ

俺が歩くと、山賊風の奴らが俺を避ける。

仕方ないので一番動きの鈍そうな大男に向かっていき、そいつの襟

首を掴んだ。

「逃げんな」

「うわわわっ!」

重さ的にはちょうど良く、「弾」が大きいので的にも当てやすそう
だ。

俺は襟首をつかんだまま、そいつの腰の辺りを持って持ち上げた。

すると、周りにいた山賊風の奴らがわれ先へと逃げ出した。

俺はそいつらの中で動きの鈍そうな奴を選び、そいつに向かって「
弾」を投げた。

「せいっ!!」

「ぎゃーーーーー!!」

弾は一直線で狙った的のほうに向かっていき、見事命中した。

そしていつの間にか、周りには山賊風の奴らの姿は俺が投げた「弾」
と「的」以外は全部消えていた。

俺はその様子に、傍観を決め込んでいたルースのほうを向いて言っ

た。

「じゃ、行くか」

「そうだね」

地面に置いた荷物をもう一度背負い、俺達は旅を再開した。

王都到着。そしてギルドへ

大陸には大きく分けて、三つの国がある。

人が多く住む、パンゲア王国

妖精や亜人が多く住む、ディナ・シー公国

妖魔、悪魔が多く住む、シャイターン帝国

以上の三つだ。

シャターンは他国と仲が悪いが、パンゲアとディナ・シーの仲は良好だ。

その為どちらの国にも人や亜人が多く出入りする。

そして、人の王が治めるパンゲア王国最大都市。

王都ミドガルド。

そこに二人の青年が入っていった。

「意外にも楽しかったな…。もっと時間が掛かるかと思った」

「最近は戦争もなくて平和ボケしてるんでしょう。そうでなければ私達がこんなに簡単に入れるわけがありません」

「なるほど」

ガルとルースは街中をのんびりと歩きながら、先ほどの王都に入るとききの審査について話していた。

審査は簡単で、持ち物調査と王都に何しにきたのかを質問されただけだった。

怪しいものなど何も持っていなかった二人はただ「恩人を探しにきた」とだけ言って、門番にあっさりと通された。

「それで？ ギルドってのはどこだ？」

「えーっと、門を出て真っ直ぐ行った所に大きな看板が出ていると門番の方は言っていました…」

二人はそう言って親切な門番に言われた、「ギルド」と呼ばれる場

所を探している。

「いやー、それにしても随分と便利なものができたんですね。モンスター討伐から飼い猫探しまでするとは。ギルドとはなんて素晴らしいところなんでしょう。」

「単純に節操がないだけだろ」

「いいではないですか、便利なら」

「まっ、そうだな」

ギルドには様々な業種の人間が仕事を探しにやってくる。

そして、普通の人の仕事に依頼する事も簡単に出来る。

「人を探しているならギルドに依頼すればいい」と言う助言に従い、彼らはギルドを目指した。

「つと、ここのようなですね。看板もしつかりと出ています」

「結構でかいな。俺のとこの道場みたいだ。まあ、こっちは三階建てだが」

そう言って二人は普通の民家が三つは入りそうな大きな建物を見上げた。

建物には「GUILD ギルド 王都ミドガルド店」とでかでかと大きな看板が垂れ下がっていた。

それを二人は特に驚くでもなく、物怖じせずにスタスタとギルドの中に入ってしまった。

「すみません。仕事を依頼するにはどうすればよいのでしょうか？」
店内に入り、すぐ受付らしきものを見つけたルースは早速仕事の依頼をしようとする。

「なぜコイツが俺の依頼を頼むか」と疑問に思ったが、社交性が無い自分が人に物を頼むのは難しいだろうと思い、ほうっておく事にした。

…それに

「は、はい！　どんなご依頼でしょうか！？」

：俄然はりきりだした、あの受付嬢の楽しみを奪うのは少し気が引ける。

あつ、あの受付だけ受付嬢がいつきに三人に増えたぞ。美形は得だなオイ。

「それでは探し人の特徴を教えてください！」

「えーっと、ですね。赤い髪と翡翠色の瞳が特徴の貴族の令嬢です」
にこやかに答えるルース。

「ね、年齢は分かりますか？」

それと反対に顔が曇り始める受付嬢。

「えーっと、多分あそこにいる黒い服の青年と同じくらいだと思います」

そういつて俺のほうを指差したルース。受付嬢たちがものすごい目で俺を見てきた。

(…こわっ)

受付嬢たちは俺を顔を見た後、今度はものすごく悲しそうな顔と声

で口々に、

「さ、探している方は恋人ですか？」 「ち、ちがいますよね？」 「違うと言って下さいっ！」

と言ってルースを苦笑いさせた。

そして、ルースは苦笑いのまま 「私の恋人ではありません。友人のです」 と言った。

俺はそれを聞いた瞬間、受付で受付嬢相手にボケたことを言った馬鹿の頭を叩いた。

スパーン！

結構いい音がして、ルースがこちらを少し涙目で見てきた。

なにがいいのか、ついでに受付嬢が頬を赤くさせている。

「…ちょっと酷くないですか」

「ボケた事いつてるからだ。さっさと依頼を頼むぞ」

俺はルースにそう言って、受付嬢達に探し人の依頼を正式に頼んだ。

「依頼は受けてくれる人がいないといつまで掛かるか分からない」と言われたので通常の1・5倍の料金で依頼した。

俺は仕事の依頼料をさっさと渡して依頼完了。

後は情報が来るまで待つだけ、それまでは街で宿を取りながら自分達でも地道に探す。

だが、その前に

「腹が減ったな。どっかで食ってくか」

「そうですね、どこがいいでしょうか？　せつかくですから王都でしか食べれない物でも食べましょうよ」

「さっき依頼して懐がさみしい。奢ってくれ」

「まあ、いいですよ。路銀はかなりありますし」

そう言って二人は空腹を満たすため、受付の前から玄関の方にスタスタ歩いていく。

すると、その様子をみた受付三人娘が受付から身を乗り出して言った。

「ま、待ってください!」「しょ、食事なら…!」「ここで!」
「ここで出来ますっ!」

「え?」「は?」

その言葉に少し面食らいながら受付に引き返す二人。

「は? 何ここって飯食えるの?」

ビクッ!!!

俺がそういうと、受付三人娘がなぜか怯えた。

「ここでは食事ができるのですか?」

「「はい!」 そうです」

今度はルースが声をかけると、ものすごく嬉しそうな声で返事をする受付三人娘。

「……………。」

俺はもう何も言わない。

なにやらルースと三人娘が和気藹々と話しているが俺は無視する。

しばらく俺は意識を遠くに飛ばして辛い現実から逃げた。

「ガルー！ガルー！」

「ん？」

いつの間にかルースが俺の肩を叩いていた。

「ガルー、ガルー！ 凄いですよここは！ 食堂どころか、武器や

防具や簡単な薬まで取り扱っているそうです！」

「ふーん」

なんだか興奮した様子のルースに俺は気のない返事をする。

「それに！ ここのすぐ近くにギルドのメンバーが使える格安宿があるそうです！」

「へー」

あの受付の三人娘に薦められたんだろ？ 知ってるよ、意識飛ばしても声は聞こえてたから。

「でも、俺達はギルドのメンバーじゃないぞ」

「ああ、それなら大丈夫です。さっきコレを貰いました」

そう言ってトランプのカードらしきものを渡してきた。

二つあって、その内一つを俺に渡してきた。

「…なんだコレ？」

それは裏にも表にも、文字も何にもない白紙のカードだった。

俺が突然渡された白紙のカードに困惑していると、ルースがにこやかに笑いながらカードについて説明し始めた。

「これですね、ギルドカードと言ってギルドに加入したギルドメンバーが持っているカードです。これは依頼を達成することに星が増えて、その数によって色が変わるんです」

「ふーん」

俺は対して興味がなかったので適当に相槌をうった。

「最初は星が殆どないので白紙の様な白。それから徐々に色がついていき青、黄色、緑、赤、銀、金と豪華な色になっていくそうです」

「へー、それで？」

本当にどうでも良いので、テキトーに会話を続けた。

「はい！ なんでも金色カードになるとギルドの施設がほぼ無料で使えるそうです！」

「ふーん」 意外としょぼいな。

「そして、都市によっては国賓待遇で迎えてくれるそうです。さら

に、王城に招かれることもあるとか!」

「あつ、そりゃすごい」

王城に招かれるのは凄い。確か貴族しか入れないんじゃないかなかったか?

「で、そんなカードを何で俺達が持つてるんだ? 俺もお前も、ギルドには加入してないはずだぞ?」

俺は白いカードをヒラヒラ振りながらルースに聞いた。

「さっきの子達が無料で作ってくれました。宿を決めていないといったら、さっき話した格安の宿に泊まれるようにと、とても親切に」
ある意味予想通りの答えが返ってきた。

「∴あつそ。まあ、いいや。それより食事は?」

俺は少し疲れた。早く飯を食いたい。

「ああ、二階が食堂だそうです」

「じゃ、行くか」

「はい」

俺はカードを懷にしまいながら、ルースと一緒に食堂に向かった。

騒ぎ

俺とルースは食堂に行き、そこで軽い食事をとった。

俺が骨付き肉を五人前と、ルースがトマトサンドを一人前。

それを完食した後、俺達はこれから話を話し始めた。

「それで、ガル。これからどうします？」

「街の酒場や食堂でしらみつぶしに情報を集める」

「ふむ、それもいいですね。しかし、それまでの宿代はどうします？」

「お前の金を使う」

「しれっと言わないでください。私のお金は私のものです」

「ちっ」

俺は舌打ちをした。

ここまでの旅費や食事代を散々たかってきたが、そろそろ限界が来たようだ。

（仕方ない、テキトーに力仕事でもして…）

「そこで提案なのですが！」

俺はルースに金をたかる事を諦め、宿代を稼ぐ方法を考えていると、ルースの奴がテーブルに身を乗り出してきた。

「ここはギルドです！仕事なら山ほどありますから、ここで路銀を稼ぎましょう！」

「……………」

ルースの言葉に、俺はめんどくさいと思いながらも、金を稼ぐならそれもありだと思った。

ギルドは色んな仕事が依頼されてきているから、きっと力仕事なんかもあることだろう。

なので俺はルースの意見を採用して、一息ついたから、一階に戻って試しに依頼を受けに入った。

「だからっ！これは私たちが先にとつてた依頼よっ！」

「ふざけんなクソっ！俺たちが先だったろっ！」

なにやら二人の男と女が白熱した言い争いをしている。二人とも完全にキレているようで今にも相手に殴りかかりそうだった。

さらに、二人とも仲間がいるようで、二人の後ろを緊迫した様子で見ている男女が数人がいた。

こちらも完全に頭に血が上っているようで、今にも武器をだしそうだ。

俺たちはその様子を遠めで眺めながら、どうするか迷っていた。

「ちょうどあいづらがいる位置に、依頼の紙が張ってあるボードがあるんだよなあ」

「そうですね」

「仕方ないから帰るか？」

「そうですね、ちょっとこれは流血沙汰になりそうな感じですし」

「じゃ帰るか。今日は酒場で情報収集して、明日またここに来よう」

「はいそうですね」

そんな話をしながら俺たちはギルドの出口に向かった。

しかし、

「ま、待ってください…！」 「お、お願いします！」 「お願いですから帰らないでっ…！」

なにやらルースの奴が服の端っこを例の三人娘に掴まれて、身動きが取れなくなった。

こいつは女の手を無理矢理振り払ったりしない奴なので、こうなると動けない。

「えーっと？ お嬢さん方？ 私は帰りたいのですが？」

「お願いしますっ…！ もう少しだけここにいてくださいっ！」 「い、いまの軍の警備隊の方を呼んでいるのでそれまでっ…！」 「いてくれるだけいいですからっ！ ただ、いてくれるだけでっ！」

「えーっと」

そこでチラッと俺のほうを見てくるルース。

俺は涙目の女に服を掴まれているルースに、手を振って「わかったわかった」とジェスチャーをする。

しかし、警備隊の人間を待つが、いつまでたっても来る様子はなかった。

そして、目の前の口喧嘩はますます白熱していった。

俺はそれを見ながら、頭を引っ込めて喧嘩を見ていた受付三人娘に声をかけた。

「なあ、いつまでこうしてればいいんだ。お嬢さん方？」

「えっと。あ、あともう少し」

「五分前も同じ事聞いたな」

「ほ、本当にもう少しですから」

「……………」

「えっと、えっと」

俺が無言になると、三人とも萎縮してしまった。

すると、それを見ていたルースが三人に声をかけた。

「大丈夫ですよ。ちゃんと警備隊の方が来るまで待ってますからね」

「「あ、ありがとうございます…！」」

ルースの言葉に少し緊張が和らいだのか、ほっとする三人娘。

その様子に俺はため息をついた。

意外にも警備隊の人間がやってきたのはそれからすぐの事だった。

ギルドの玄関から数人の全身鎧を着込んだ人間がドカドカと入って

きて、一番小柄な奴が受付娘の一人に事情を聞いて、すぐに喧嘩している場所に飛んでいった。

だが、喧嘩しているのは荒事専門の人間ばかりだったのか、喧嘩を収めるに大分苦労しているようだった。

小柄な警備隊の人間が喧嘩の理由を聞こうとすると、両方のグループから違った意見が出てなかなか騒ぎが収まらない。

仕方ないので、警備隊の人間がグループのリーダーを二人だけ警備隊の詰め所まで連行する事で話がついた。

だが、それを二人のリーダーのグループの人間達は不服だったようで、その警備隊の人間に対して軽い暴力を振るった。

「なんで内のリーダーが連れていかれなきゃいけないんだよっ！
悪いのはあいつらだろっ！」

比較的メンバーの中で若い男が警備隊の人間の胸倉を掴んだ。

「おい！ お前その手を離せっ！」

それを見た他の警備隊の人間が慌てて若い男を取り押さえようとする。

徐々に場は混乱していき、このままでは怪我人が出そうな勢いだ。

さすがに目の前で怪我人が出るのは気分が悪いと思い、俺は騒ぎの中心に向かった。

「ちょっと、行ってくる。荷物は頼んだ」

「わかりました。気をつけて」

ルースに荷物を預け、俺は肩の骨を鳴らして歩いていく。

「おい、アンタ」

「ああ!？」

近くにいたグループの一人の肩を叩く、

そして、

「邪魔だ」

ガッ！

手のひらでそいつの顔面を叩いた。

平手というよりは掌底気味だったのでそいつは脳を揺さぶられて、あっさりと気を失って倒れた。

メンバーの一人が倒れた事で、全員の意識がこちらに向くかと思っただが、頭に血が上っているのか、数人しか俺の方を見なかった。

「ああ！？ 何だコイツっ！」

「ユルの奴が倒れてるぞっ！」

二人の男が倒れた奴に気づいて、俺のほうを見た。

頭に血が上った奴と会話するのは面倒なので、手で「来い来い」と挑発する。

「なめやがってっ…！」

「ぶっ殺すっ！」

すると、簡単に誘いに乗ってきてくる二人。

俺はお礼に平手と裏拳で二人を仲良く床に寝させてやった。

「残りは五人か」

グループは二つあわせての計八人のメンバーだったから、あと五人を眠らせればこの騒ぎは収まるだろう。

メンバーの中には女もいたから顔と腹を攻撃するときは気をつけよう。

俺はそんな甘い事を考えながら、しり込みし始めたグループのメンバーを一人ずつ気絶させていった。

最後に二つのグループのリーダーをチョップで沈めると騒ぎは完全に収まった。

幸い怪我人は殆どいなかったようだが、胸倉を掴まれていた小柄な警備隊の人間は少し殴られていたのか、被っていた兜が少し脱げて床に座り込んでいた。

俺はそいつの傍まで近づいて、大丈夫か声をかけようとした。

だが、そこで妙な違和感を覚えた。

「ん…？」

まず、目の前の警備隊の隊員の体が小柄すぎる。

次に、小柄なわりに妙に丸っこい。

最後に、ずれた兜から「真っ赤」な髪の毛が見えた。

まさか、と思った。

そんな馬鹿な、と。

「っ…！」

思わず、俺はその隊員の兜をひっぺがした。

「あっ…！」

兜を外すと、男にしてキメの細かい肌と、女っぽい丸びを帯びた綺麗な顔立ちが出てきた。

鎧を着込んでいるし、髪が短いので違和感があるが、間違いない。

『女』だ。

そして、俺はこの女に見覚えがあった。

成長しているが面影がある。

特に、俺のことを目を丸くして見る『翡翠色の瞳』に。

「…見つけた」

俺は確信する。

目の前の隊員は、間違いなくあの時の少女だと。

願

「俺の事覚えてるかっ!？」

目の前の鎧を着込んだ少女の肩を掴んで、叫ぶように俺は言った。

正直、こんな所であのときの少女に会えると思わなかった俺はかなり興奮した。

まわりの状況などお構いなしに少女の肩を掴んで早口でまくし立てた。

「覚えてるか? 十年以上前の事だけど、俺は森でアンタに助けられたんだ!」

「えっ? も、森で? 貴方を助けた?」

しかし、突然の事についていけない少女は困惑していた。

だが、俺はそんなこと無視して、俺がここに來た理由を目の前の少女に話した。

「そうだ! 森で俺はアンタに助けられたんだ! 俺はその時の恩を返したい! 何か願いはないか? 何でも言ってくれ! 必ず叶えてやる!」

目の前の少女に向かって力強い声で、そう宣言した。

言葉に嘘はない。

俺はこの少女に恩を返すためになんでもするつもりだった。

俺は少女の返事を待った。

私は動揺していた。

目の前の男性が、喧嘩していたギルドのメンバーを素手で次々と気絶させた事もそうだが、いきなり自分の被ってきた兜をとった事にも驚いた。

そして、なによりも驚いたのは、先ほどの言葉だ。

なんでも自分が目の前の男性を十年以上前に助けた恩人で、目の前の彼はその恩を私に返したいらしい。

胡散臭い話だと思う。

実際、私には森で人を助けた記憶などないし、目の前の男性にも見覚えがない。

だが、目の前の男性の言葉に込められた重みは、嘘だとは思えなかった。

だから、だろう。

私は思わず、自分が叶えたい「願い」を言ってしまった。

「…没落しかけの我が家を復興させたい」

「叶えやる」

俺は少女の願いに即答した。

「え?」

だが、少女は俺の言葉が良く聞こえなかったようだ。

だから、もう一度言った。

「時間にかかるかもしれない。だが、絶対叶えてやる」

「……………」

もう一度言っただが、今度は沈黙してしまった。

また聞こえなかったのかと思って、再度少女に言葉をかけようとしたが、

「嘘じゃない。俺は――」

スパンッ！！

頬に衝撃。

目の前には手を振り切った少女。いつのまにか、俺は少女の肩から手を離していた。

状況から察するに、俺は少女にビンタされたらしい。

俺が叩かれた状態で目を丸くしていると、少女が叫んだ。

「貴方、最低っ……！」

そう言って、少女は肩を怒らせて俺の前から消えて行った。

残ったのは周りで気絶したまんまのギルドメンバーと、野次馬と警備隊の人間。

野次馬と警備隊の奴らからは、なぜか気の毒そうな目で見られていた。

だが、そんな事どうだっていい。

俺が興味があるのは一つだけだ。

俺は少女が消えて行った場所に、急いで走った行った。

叫び

「なあ、待ってくれよ！」

「……………」

俺は前を歩く鎧を着た少女の背中に声をかけた。

その少女は先ほど俺の頬を張った、あの少女だ。

俺は頬を張られた後、ギルドを飛び出した少女を追い、街中を肩を怒らせながら歩く少女を見つけた。

そして、今俺はなんとかこの少女と話をするために少女の後ろから声をかけ続けた。

「どうして怒ってんだ？　俺が何か気に障ることも言ったか？」

「……………」

返事は全く返ってこないが、それでもこの少女となにか会話をするために一方的な会話を続けた。

「まさか、さっきの俺の言葉が冗談だとも思ったのか？　だった
らそれは違うぞ、俺は本気で——」

「……うるさい」

少女が突然立ち止まり、振り向きながらこちらをものすごい形相で睨んできた。

「!？」

俺はその顔を見て驚いた。

明らかに殺気を含んだ目で俺のことを睨んでいたからだ。

この少女にそんな目で睨まれた事にショックを受け、俺は呆然としてしまった。

そして、そんな俺に少女は冷たく言葉を投げかけた。

「：どこで私の話を聞いたのかわからないけど、からかうなら他を当たってくれない？　：確かに馬鹿な事かも知れないけど、私は真剣なのよっ！」

前半は怒りを押し込めた声で、そして後半はその押さえた怒りが爆発したかのような声で、俺に言葉をぶつけて来た。

なにやら、俺が自分をからかって遊んでいると思っっているようだ。

だが、俺にはそんなつもりは全くない。この少女が何を勘違いしているのかわからないが、俺の目的は一つだけだ。

少女の誤解を解こうと思うが、俺は呆然として、何も言葉を返す事ができない。

だが、

「…もう十分満足でしょう？　もう、放っておいてよ…」

怒りか、悲しみか、もしくは、その両方で肩を震わせる少女を見たとき、俺は言葉を口にできるようになった。

「…たすけてやる」

「えっ？」

俺は肩を震わせる少女に近づき、上から少女の頭を見下ろす形で話しかけた。

「俺がお前を助けてやる」

「ま、また！　わ、私をからかって…！」

少女は俺が突然言った言葉に怒り出した。やはり、俺の事を自分からかって遊んでいる奴に見えているらしい。

俺はいい加減それにキレた。

「からかってなんかいねえよ！　俺は本気でアンタに恩を返しに来たんだよっ！」

「!？」

少女は突然キレた俺に驚いたようだが、俺は構わずまくし立てた。

「さっき、アンタはギルドで言ったよな！ 『没落しかけの我が家を復興させたい』 って！」

「え、ええ」

「つまり、困ってるんだろ！ 助けて欲しいんだろ！ だったら俺に命令しろよ！ 『助けてくれ』 って言えよ！ 俺は絶対にそれを叶えてやるから！ だから言え！ そして——」

俺はそこで俺の事をポカーンとして見上げる少女に向かって、最後に叫んだ。

「俺に恩を返させろっ！」

合流

『俺に恩を返させろっ!』

俺が大声で叫ぶと少女は身を竦ませ、目を丸くして俺の事を見た。

「わ、私は――」

「えっーと、君達? 白昼の人通りの多い街中でこれ以上はちょっとやめたほうがよくないですか?」

「「!?!」」

そして、少女が何かを言おうとしたところで、途中で邪魔が入った。

声のした方を見れば、そこにいたのはギルドに置いてきた俺の旅の相方だった。

そいつは俺の荷物と自分の荷物を両手に持った、酷く間抜けな姿で俺達のことを見ていた。

だが、よく考えると間抜けなのは俺のほうかもしれない。

白昼堂々と、街中で少女に向かって熱く叫ぶ男。正直、自分のことじゃなかったら見た瞬間に爆笑するか呆れているかのどちらかだっただろう。

俺はその事に気がつき、顔を少しひくついた。

だが、そこは何とか悟られないように低い声を出してごまかした。

「ああ？　なんだよお前、なんでここにいるんだよ？」

「貴方達を心配で追ってきたんですよ。意外にも簡単に見つかってよかったです。真昼間から喧嘩している男女が騒いでいると、街の人たちが話していたのでその騒ぎの場所に行ってみたら、案の定でした。」

「……くそっ」

俺は小さく舌打ちした。

だが、こいつのことは今はどうだっていい。

俺は話の続きをするために少女のほうに振り返った。

「おい、さっきの話の続きだけどー」

「おっと、ガルーそれはちょっと場所を変えましょう」

「あ？　何でそんな事ー」

少女と話の続きをしようと所でまた邪魔が入り、俺はルースに文句を言おうとしたが、

「…周りを見てください」

「ん？」

ルースの言葉に、俺はおもわず周りを見回した。

すると、いるわいるわ。人が俺達三人を囲むようにぐるっと丸く人垣を作っていた。

俺はそれに小さく舌打ちをした。

「くそっ」

「まあ、そういうことです。そこのお嬢さんと話の続きをしたいなら場所を変えましょう」

「…わーったよ。…おい、ちょっと悪いが場所を変えるぞ」

俺はルースの言葉にしぶしぶ頷き、少女に話の場所を変えるために声をかけた。

声をかけると、少女は何故か少しボーっとしていた、

「…おい。アンタ話聞いてたか？」

少女の視線を追ってみると、その先にはルース。どうやら、ルースの顔を見て顔を赤くしていたようだ。

俺はそれに少し呆れながら、「…行くぞ」と言いながら無理矢理手を引いて、適当に話が出来る場所を探した。

身の上話

パンゲア王国第十六警備隊に所属する一般隊員。

テレサⅡハウスローゼン。

それが私だ。

いきなりだけど、私の家は没落しかけている。

私の父は一つの町を治める男爵だ。

父が男爵という事で昔はそこそ裕福な暮らしをしていたけれど、今はとても質素な暮らしをしている。

ほとんど街に住む平民と同じような暮らしだ。でもこれは別に父が商売に失敗したとか屋敷の金を散財したとかじゃない。

すべてはモンスターのせい。

数年前に大量発生したあいつらのせいで畑や農園が荒らされ、領民の多くが犠牲になってしまった。

幸い、すぐに王国の正規軍が討伐に来てくれてモンスターは大方駆逐できたけど、町には大きな被害が出た。

作物はほぼ全滅、貴重な働き手である男性達は家族を守るために戦って大勢死んでしまった。

これにより町の復興が王国からの援助金だけではだいぶ困難になってしまった。

父も資金繰りには頑張ったのだけど、町の復興は程遠かった。

街の復興資金も、領民の食料費も、お金がかなりかかる。

それでも父は諦めずに町の復興に尽力し続けた。

屋敷にあった金目の物を全て売って領民に食料を配ったことだってある。

領民はそんな父に感謝して、辛い生活にも耐えてくれた。

そして町が壊滅的な打撃受けてから数年後、町は徐々に活気を取り戻していった。

荒らされた畑や農園も元のように戻り、町の復興に伴って新しい住民も増えた。

「これですべてが元に戻った」と私は安心していた。

だが、意外な落とし穴があった。

借金だ。

父は町の復興を急ぐあまり、色々なところから借金をしていた。

その額はすでに金目の物は売りつくした我が家ではすぐに返せる額ではなく、徐々に借金の額は上がっていった。

そのことで父は毎晩のように悩んでいた。

王国からの援助金はまだ届くが、それを自分達の借金を返すために使うわけにはいかない。

復興しかっている町の住民に突然税の引き上げを言うのは少し酷だ。

かといって借金を返すため新しい事業を始める資金も人材も材料もない。

だが、何もしないと我が家は借金で没落してしまう。

そうなっては我が家は没落。長年つかえてくれた使用人達も路頭に迷ってしまう。

それだけは避けなくてはいけないと私は思い、私は借金が少しでも減らせるように王都で働く事にした。

幸い、昔から体を動かす事は好きだったし護身の為に剣術も少しだが習っていた。

父は反対したが、私は体さえあればどんな人でも入隊を許可してくれる王都警備隊に十六歳の時に入隊した。

そして、入隊して二年。

本当に少しづつだが我が家の借金も少しづつ減っていき、このまま順調にいけば、あと五年ほどで借金はなくなるはずだ。

こんな話を私は目の前の黒ずくめの青年に話してしまった。

黒ずくめの青年の名前はガルーというらしい。

なんでもガルーは過去に私に助けられたことがあるらしい。

でも、私は全く覚えていない。

その事はガルーに話しけど、ガルーは「アンタで間違いない」といって譲らなかった。

さらにガルーは真剣な顔で「それでギルドでアンタから聞いた『家を復興させたい』ってどういう事なんだ？」と言って、

私がいまどういう状況なのかを詳しく聞いてきた。

そんなガルーに私は威圧されてしまい、すべて話してしまった。

正直、ここまで全てを話すつもりはなかったのだが気がつけば全て話していた。

多分日頃のストレスがたまっていた証拠だろう。

だけど、おかげで少しすっきりした。

最近では私の家の噂を聞いてちょっかいを出してくる人が出てきて嫌気が差していたのだ。実は最初はガルーのこともこの手の人だと

思っていた。

でも、それは勘違いだった。

先ほど街中で聞いたガルーの言葉。

アレは本物だった。

強い意志の籠った声に、むき出しの感情。

勘違いしていた私に怒り、自分の強い感情をぶつけてきたガルー。

あの言葉に嘘はない。

私は自信を持ってそう言える。

だって、私を見下ろしていたガルーの顔を、私は目の前で見ていたから。

その時のガルーの顔は、自分の言っている言葉を信じて貰えなかった子供の顔だった。

どうすれば信じて貰えるのか頭を悩ませるのだけれど、上手く言葉

にできないもどかしさ。

自分を信じてくれない悲しさと悔しさ、相手に対するどうしようもない怒り。

それらが混ざり合った複雑な表情。

困ったような、泣き出してしまいそうな、複雑な感情が全部詰まったその顔。

本当に、「今にも泣き出すのでは？」と思ったほどガルーの顔は悲しそうだった。

私をからかうのが目的ならば、私に向かってあんなに大声で叫ぶはずがない。

あんな泣きそうな顔で私を見るはずがない。

むき出しの感情をぶつけて叫び、泣きそうな顔で私を見るガルー。

まるで、幼い子どもように自分の感情をむき出しにするガルー。

不器用なガルー。

なんというか、…私が彼の言葉を信じた大きな理由はそこにある。

つまり、

こんな不器用な人が、嘘について人を騙せるとは思わなかったからだ。

余談だが、

街中で言い争いをしていたガルーと私を諫めてくれた「ルース」さんと言う銀髪の男性がガルーについて詳しく説明してくれた。

驚く事に、このガルーという青年。

私に恩を返すためだけに住んでいた村を『夜逃げ』してきたらしいのだ。

なんでもガルーは住んでいた村の中ではなかなか優秀な青年で、村の名誉職にもついていたらしい。

でも、彼本人はそんな事に興味はなく、「そろそろ力がついた」と自分に自信がつくと夜中に村を抜け出して、昔の恩人を探しに旅に出たらしい。

私はそれを聞いて開いた口が塞がらなかった。

自分も結構な行動派だと思っていたが、上には上がいた。

昔の恩人を探しに、職も村も捨てて旅に出るなんて聞いたことがない。

さらに、ルースさんが「ちなみにガル―は貴方の目と髪の色ぐらいしか覚えていませんでした」と言ったのを聞いて、私は

もう頭を抱えてしまった。

：馬鹿だ。大馬鹿がいる。

そんな曖昧な特徴だけで村を夜逃げして、旅をしてきたのか。

私は少しルースさんを同情的な目で見てしまった。

きっと、彼は無理矢理旅に同行させられたのだろう。なんて不憫な人だろう。

まあ、この話を聞いてから余計に私はガル―が「悪人」ではないと確信するわけだが、それにしてもどういう人間なのだろう、このガル―という青年は。

金稼ぎ

テレサと名乗った俺の恩人の身の上話をすべて聞いてから、俺は席を立った。

俺が席を立ったのを見てテレサとなぜか一緒に話を聞いていたルースの野郎も俺のほうを見た。

二人は俺が席を立ったことに不思議そうに見ていたが、俺はこれからしなければならぬ事ができたので一言だけ言葉を残して二人に背を向けて店を出た。

ちなみに、二人に言ったのはこんな言葉だ。

「金稼ぎに行つて来る」

ガルーが『金稼ぎに行つてくる』という言葉を残して店を出た後、ルースとテレサは顔を見合せて話しを始めた。

「…あの、ルースさんでしたっけ？　あなたのお名前は」

「はい、そうです」

「そのー、ルースさんに聞きたいんですけど。…まさかあの人が、私が借金の返済で困ってるって言ったから、あんなことを言ったんでしょうか？」

「はい、その通りです。」

「…あの人は馬鹿なんですか？」

「ああ、あなたもそう思います？　実は私もです。」

「……………」

「まあ、そもそもですね。あのガルーと言う男は—」

ルースはそう言って、ガルーについて色々とテレサに情報を吹き込んだ。

そして、ルースの話を聞いたテレサはいくつかのことを理解した。

それは、

ガルーと言うあの青年がものすごい馬鹿だという事と、ルースと言うこの青年が意外におしゃべりだという事だ。

場所は変わり、ギルドの依頼ボードの前。

つい先ほどまで騒ぎがあった場所だが、今はその様子もなく人もまばらだった。

依頼ボードの前には数人のギルドメンバーが依頼ボードに張られた依頼書を吟味するように見ているだけで、もういつも通りのギルドに戻っていた。

…だが、その戻った平穏を壊す青年が現れた。

その青年は依頼ボードの張られた『討伐依頼』の依頼書を一枚一枚奪い取るように引き剥がし、受付へ向かい、そのすべての依頼を請けようとした。

だが、そんな無茶な仕事の請け方は受付が認めるわけがなく散々もめた。

しかし、最後には受付のほう折れ、そいつはその大量の討伐依頼の仕事を請けることになった。

ちなみに、依頼書の内容はこのようなものだ。

『紅狼を10匹討伐』 『食人植物の群生の討伐』 『岩トカゲ3匹討伐』 『二股蛇を2匹討伐』 『角熊を1匹討伐』

依頼書の共通点は、すべてが中級のモンスターの討伐依頼で、そのすべてのモンスター達の生息地帯が王都から少し離れた場所にある深い森だった。

そして、その一つ一つの依頼難度が高く、黄色から緑色のギルドカードを持っている人間が請けるような、中々に難易度の高い依頼だった。

普通ならばこのような依頼は、ギルドの中で戦闘に特化した人間でしつかりパーティを組み、準備を整えてから望む。

だが、そいつはそんな事をするそぶりは一切せずに、買い物に行くような気軽さでモンスターの討伐に向かった。

ギルドにいた人間はその姿を見て「田舎から出てきた若造が調子にのっている」と思っていたが、次の日からその評価を改

める事になる。

翌朝、ギルドの前にあの黒ずくめの青年が現れた。

―手には、いくつものモンスターの「首」を持って。

おそらく彼が、その手に持ったモンスター達を討伐してきたのだらう。

だが、そのわりに青年には怪我もなく、また疲れた様子もなかった。それどころか、青年は実にめんどくさそうな仕草で受付のカウンターに複数のモンスターの首を置き、依頼が終わった事を報告した。

まわりがその様子に驚く中、青年はさっさと依頼達成の手続きをした後、報酬金50万をもらいすぐどこかに消えた。

この日から、その青年はギルドの中で特に注目される「ハンター」となった。

金稼ぎ（後書き）

感想が増えてきてとても嬉しいです。
これからも更新頑張ります。

笛

「は？ 何言ってるんのお前？」

ガル―は目の前のテレサに向かってそう言った。

「え？ だって、これは恩返しなんでしょう？」

「いんや、違う」

それに対して、テレサのほうは少し戸惑った。

「…じゃ、このお金ってなに？」

「お前が借金に困ってたみたいだから、その手助けだ」

「あの、だからそれが恩返しなんじゃ…」

「ちげえよ」

ガル―は乱暴にそう言って、しつこく質問を繰り返すテレサの言葉をきった。

「……………」

それにテレサは少しムツとする。

「…あー」

ガルーはそんなテレサを見て「しまった」と思った。

不機嫌にさせてしまった事に気がつき、なんとか機嫌を直してもらおうと色々頭をめぐらせる。

だが、そういったことに疎いガルーは上手く言葉がでない。

苦し紛れに、テレサが先ほど自分に聞いていた質問の答えを返すことにした。

「俺がお前に金を渡す事に恩返しの意味はねえよ」

「…意味がわからない。あなたは私の借金の話を聞いて、それを返すことを恩返しの目的にしたんでしょう？」

「あ？ 全然違うぞ。だって、これは――」

テレサの言葉を否定するガルーの目にふざけた様子はなかった。

だから、続けて言ったガルーの言葉は本気だった。

「ガルーは格好をつけるでもなく、ごく自然にこう言った。

「俺が勝手にしてることだろ？」

「…えっと、つまりこういう事？ 私の借金の返済を手伝ってくれるけど、それに恩返しの意味はないと？」

「まあ、そうだ」

「……………」

ガルーの「それがどうした？」といわんばかりの顔を見て頭を抱えそうになった。

正直、渡されたお金を受け取るのにかなりの葛藤もあったりもしたのだが、ガルーの行動の意味を理解したら、そんなものは吹き飛んでしまった。

突然、警備隊の屯所に来てお金の入った袋を渡したと思ったらコレだ。

前日のアレがあったので、なんとなく来るだろうと思っていた。

だから、お金をありがたくもらい感謝の言葉に「恩返しありがとう。でも、もう気持ちだけで十分だから」と言ったら、コレだ。

なんだか、全部を台無しにされたような気分だった。

「テレサ」

「…なによ」

私がなんだかぐったり疲れていると、ガルーがこちらに手を出して何かを渡してくる。

「コレ渡しておく。必要なとき吹け」

そう言ってガルーが渡してきたのは銀色の笛だった。

私はそれを素直に受け取った。

もう、正直な所やけくそぎみだったのだろう。

受け取ってから改めて笛を見た。

笛は銀色で細長く、手のひらに乗るような小さなものだった。

銀色の笛には細かい意匠が施されていて、まるでアクセサリーのようにも見えた。

さらに、首から下げられるように笛には紐が通っている。

（まさか、プレゼント！？）

おもわず、目の前の男とこの綺麗な笛を見比べる。

「あ、あのこれって―」

「危ないときか、なんか問題があったときに思いつきり吹け」

「え？」

「じゃ、また来る」

私がガルーにこの笛を渡した意味を聞こうとしたら、ガルーはそんな事を言って屯所から出て行ってしまった。

私はこの時かなり動揺して、ガルーを追いかけることができなかった

初めて家族以外の男性からプレゼント渡された。

そのことが思ったよりも恥ずかしくて、思っていたよりずっと嬉しかった。

なんだか、そのままガルー追いかけたらとんでもない事になりそう
だ。

だから、私はガルーを追いかけるのを諦めて、渡された笛を見ながら
今度ガルーに会ったときに言う台詞を考える事にした。

男二人の会話（前書き）

かなり短いです。

男二人の会話

「とりあえず、これから俺は金稼ぎするぞ。あいつが言ってた『家を復興させたい』ってのは借金があったらできないからな」

「……借金を返せば、それが恩返しになるのでは？」

「マイナスからゼロに戻したって恩返しにならないだろ。『自分は幸せ』というくらいにプラスにしくちゃ恩返しの意味がない」

「…すごいですね。恩人の借金を返しているのに、それを『恩返し』にしないとは…」

「？ 恩人が困ってるならそれを助けんのは当たり前だろ？」

「…いや、本当にすごいです。特にそれを真顔でいうあたりが」

「意味わかんねえ。別に普通のことをしてるだけだろ」

「…そうですね。…はい、その通りです」

「?..?」

なんだか歯切れの悪い会話をするルースにガルーは違和感を覚える。

だが、目の前の男の行動を考えるのは過去の経験から無駄だと知っているので、気にしないことにした。

「まあ、そんなことはどうだっていい。…ただ、お前に一ついいたいことがあるんだ」

「…なんですか？」

「さっさと家帰れ」

「…………。」

「別にお前は俺の恩返しに付き合う義理なんかないだろ？ 王都で土産でも買って、さっさと自分の領地に帰れ」

「…んー、それはちょっとお断りします」

「…なんでだよ」

「いやー、長年の友のあんな面白い姿を見てしまったら、このまま帰るのは人生の楽しみを減らしてしまうようじゃ勿体無くて、とてもとても」

「…………この野郎」

「なので、是非今後あなた達二人の様子を見守らせてもらいたく…」

「ふざけんな。帰れ。いや、やっぱ死ね」

俺はルースの言葉を途中で斬って、奴にむかって暴言を吐いた。

「いいじゃないですか。別に減るものでもないでしょう？」

だが、奴は全く堪えている様子はない。

それどころか、実に楽しそうに俺の事を見ていやがる。

さすがその様子には少しムカついた。なので、ちょっとだけ脅してみた。

「いや、マジでふざけんなよ？　…お前どうせ俺の今の状況を見て楽しんでるだけだろ？」

「まあ、ぶっちゃけそうですが、それがなにか？」

「……………」

俺の脅しはこいつには全く効果がなかった。

寧ろ奴を調子にのせてしまったようだ。

…なんていうか。

昔からやろうと思っていたことだが、今日は本気でやってやろうかと思った。

こいつの首、ちょんぎってやりたい。

男二人の会話（後書き）

ルースにはとことん酷いガルーです。

基本ガルーが優しいのは恩人であるテレサだけ。

あー、そろそろガルーの本気を少し書きたいです。

賞金首

そろそろ、モンスターの討伐依頼以外もやってみたくなってきた。

理由は、単純に興味があったからだ。

依頼ボードにはモンスターの討伐以外にも様々な依頼があり、俺の好奇心をとっても刺激する。

別に、金を稼ぐのにモンスターの討伐が一番効率だろは思っていない。

だ、だから、色々な依頼をこなして一番効率のいいものを探してみるために、ちよつとそういったものをやってみるのもい

いんじゃないかと思う。うん。

まあ、そんなわけで改めて依頼ボードの依頼を色々吟味してみた。

そして、結論。

「：モンスター殺してるほうが楽だ」

普通の人間が聞けば目をむきそうな台詞をため息をつきながら言うガル。

「金持ちの護衛とか、俺には絶対無理だな。つか、やりたくねえ」

「はぁー」ともう一度ため息をつきながら、諦めてモンスターの討

伐依頼を探そうとしたところで、

「ん？」

ガル―は少し変わった依頼書を見つけた。

その依頼書は普通の依頼書のように細かい仕事ないようが書いているわけではなく、実に簡単な内容が書き込まれていた。

『赤鬼バツカス。懸賞金100万。生死問わず。』

「何だコレ？ 人探しか？ だけど、生死問わず？」

ガル―気になったので、受付の三人娘に聞いてみる事にした。

※※※

受付に行って、あの依頼書について聞いてみたら、

俺は三人娘に珍獣を見るような目で見られた。

「…えっと、あれは賞金首ですよ」

「賞金首？」

「ようするに、悪いことをした悪人です」

「ふーん」

「そこに書かれている額は、そこに書かれている人物を捕まえてきた時にもらえるお金の金額です。」

「へー、だったらコイツ捕まえるだけで50万もらえるのか」

「そういうことです」

「面白そうだな」

「…もしかして、あの賞金首を狙ってます？」

「ちょっとだけな」

「止めておいたほうがいいですよ？ あの賞金首は最近また危険度が上がって、賞金もその分だけ上がるって話です」

「…つまり、金額が値上がりするまで待ってって事か？」

「危険だから止めておけって言ってるんです！」

いきなりキレた受付娘にちょっと驚く。

「お、おい何キレて…」

「いいですか！？ あなたは確かに強いかもしれないですけど、モンスターを狩るのとコレは全く別ですからね！ このバツカスっていうのは王都の近くを通る行商や貴族狙う山賊の棟梁で、すごく強いんですから！ 知能の低いモンスターを狩るのとは訳が違うんです！ 山賊の一味には魔術師も居るって話ですし、本人だって『赤鬼』って呼ばれる大男で、ゴブリンが使うような大きな棍棒を使って人をバツタバツタと」

「あ？」

ちよつと、待て。今なんて言った。

赤鬼？ ゴブリンみたいな棍棒？

…なんだか、凄く覚えのあるフレーズの連呼だ。

俺はまさか、と思って、キレてる受付の娘にちよつと聞いてみた。

「…なあ、バツカスって奴。もしかして、傭兵くずれだったりしないか？」

すると、受付娘が眉を顰めながら、

「…よく知ってますね。そうです。バツカスは昔は傭兵だったそうですが、今はすっかり落ちぶれて山賊になってますよ」

と、答えた。

俺はそれを聞いて確信した。

「…あー」

間違いない『あいつ』だ。

俺は思わず笑ってしまった。

そして俺は、顔が笑ったまま受付娘にこんな質問した。

「なあ、そのバックスって山賊、最後にどこら辺に出没したかわかるか？」

「？ まあ、少し時間がかかるかも知れませんが調べる事は可能ですが、…まさかまだ狙ってるんですか？」

俺の質問を聞いた受付娘は、少し落ち着きを取り戻した。…まだ少し怒っているようだが。

だけど、今はそんなことはどうだっていい。

それよりも、面白い事になってきた。

「…なあ、山賊ってことは結構金を溜め込んでるはずだよな？」

俺がそういうと、受付娘は不思議そうに、

「…まあ、被害総額はかなりのものですから、それなりには」と言った。

(よっしゃっ！)

俺はそれを聞いて思わず拳を握り締める。

俺は勢いよくさらに聞いた。

「その金って、山賊捕まえた後どうなる？ 俺にももらえるのか？」

「…全額はさすがに無理でしょうが、お札に少しぐらいはもらえるんじゃないですか？」

どこかなげやりな受付娘の答えを聞いて俺はますます拳を握り締める。

そして、

「なあ、その山賊がよく出没する場所を通りたい商人とかいないか？」

「それは沢山いますよ？ でも、みんなその山賊が怖くて…」

俺はその台詞が終わるか終わらないかの内にこんな事を頼んだ。

「だったら、どうしてもそこを通りたい奴らの護衛。俺にさせてくれ」

この俺の頼みは受付娘に少し眉をしかめられたが、結果として話しは通った。

そして、次の日の朝から俺は。

山賊がよく出没する危険な街道を通る商人達の、「護衛」をするこ
ととなった。

賞金首（後書き）

次で多分ガルーが戦います。

この小説のお気に入り登録が増えてきました。

登録してくださった方々ありがとうございます。これからも頑張ります。

あと、なにか感想とかがあれば気軽にどうぞ。

山賊

護衛というのは実に暇な仕事だと思った。

商人が乗る荷馬車に乗って山賊が出てくるまでただ待っているだけだ。

これだけで金をもらっているのは殆ど詐欺に近いと、この仕事やっていてつねづね思った。

だが、そんな詐欺みたいな仕事にもかかわらず、商人たちは喜んで俺に護衛の仕事を頼んだ。

まあ、その理由は俺の護衛料が大分安いからだろう。

俺は普通の護衛料の半分しかもらわない。

まあ、その理由は色々ある。

例えば、俺が馬を怯えさせてしまうからだとか。

実は、商人を山賊を捕まえるための餌にしているからだとか、理由はいろいろだ。

最初は料金が安すぎて胡散臭く思われていたが、何度目かの護衛をしたときに狼の群れに遭遇してから状況が変わった。

その時、俺はちょうど荷馬車の中で寝ていて、そのキャンキャンうるさい声に苛立って起きてしまった。

最悪の起こし方をされた俺は完全にキレていて、荷馬車を追いかける狼の群れを見て思わずこんな感じで叫んでしまった。

「うるっっせんだよっ！ キャンキャン、キャンキャン吼えやがって！ ぶっ殺すぞっ！！」

その瞬間、狼達は文字通り尻尾を巻いて逃げていった。

それを見ていた商人がこの話を仲間の商人たちに話して、俺の護衛の仕事は増えていった。

だが、仕事が増えても山賊の一味は全く現れなくて、たまに現れる山賊とは関係ない野犬や低位のモンスターの駆除をいつもしていた。しかし、そんな退屈な日々が二週間ほど続いたある日。

やっと、山賊が現れた。

俺が護衛していた馬車をいつの間にか囲んだ馬に乗った荒くれ者達。

ポロ布の様な服を着て、実に不衛生そうな肌の色をしている。

ほぼ山賊で間違いないだろう。

俺は馬車からそいつらの中に目当ての奴がいるかどうか探した。

すると、大変うれしいことにいた。

一番大きな馬に乗って、棍棒を肩に担いだ三十過ぎの大男が。

俺はそいつを見つけて、笑い出しそうになりながら、服についているフードを被って馬車の外に出た。

※※※

馬車の後部から外に出ると、馬車の周りを囲んでいる数十人の男達が一斉に俺を見た。

そして、

「ああ!？　なんだコイツは!？」　「商人の仲間か？」　「つーか、他に人いねえの？　特に女あ」　「馬鹿お前、いてもこんなときに外に出られるわけないだろ」　「ええー、なんだよー、それが楽しみでコレやってんのに、いねえのかよー」　「いやいや、まだそうだと決

まってないだろ？　もしかしたら馬車の中で震えてるかもよ？　可憐なオトメが肩を震わせて、こう、プルプルと」「うおっ！！　マジか！？　俄然やる気が出てきた！」

馬鹿みたいな口調でしゃべりだす馬鹿共。

俺はそれを聞き流しながら、商人のほうに歩き始めた。

馬車の前部では緊張した面持ちの商人が、馬の手綱をきつく握り締めていた。

俺はその商人の肩を軽く叩いて、馬車の中に入っているように言った。

「ここは俺がなんとかするから、あんたは無理せずに馬車の中に入ってな」

「あ、ああ、わ、わかった」

ひどく鈍い足取りで馬車の中に入っていく商人。

俺は商人が馬車の中に入るのを確認した後、改めて山賊連中を見回した。

剣や斧、弓や槍。中には魔術師が使う杖を持っている奴もいた。

よく考えると、山賊にしては武装が良過ぎる気もするが、バツカスは昔は傭兵をやっていたから、おそらくそのつてをつかって仲間を

集めたのだろう。

まあ、そんな事はどうだっていい。

俺は口に手を当てて大声で叫んだ。

でかい馬の乗って、棍棒を担いだ馬鹿を。

「おいバツカス！ お前まだその棍棒使ってるのかーっ！！ あ
んだけ汚ねえから持つの止めろっっていただろー！」

俺の声はあたりに響いて、山賊連中にはもちろん。棟梁であるバツ
カスにももちろん届いたはずだ。

その証拠に、名前を呼ばれたバツカスの奴は露骨に動揺した。

あー、もしかしたらもう気づいたかも。

ちょっと、つまんねえ。

※※※

俺の声を聞いたバツカスは声を震わせて、フードを被った俺を指差
してきた。

そして、

「…そ、その声。ま、まさか…」

「あっ！ その様子だと、もう気がついたのか。脳みそ少ないのによく思い出せたなあ」

俺はその様子を見て、大きめの声でバツカスの奴を褒めてやった。

「げえっ！！ マジかよ!?!」

完全に俺の正体が分かったようで、思いつきり動揺していた。

「おいおい、懐かしの知り合いを前に、その態度はなんだよ」

「え、あ、いや、これは、その…」

「「……………」」

俺とバツカスが「なごやか」に話していると、その様子を見ていた山賊の手下連中は動揺を隠せないでいた。

いきなり俺が棟梁に話しかけて、しかも顔見知りのようだったのでどうしていいのかわからないのだろう。

そんな中で、バツカスの奴が俺にこう切り出してきた。

「と、ところでなんで旦那がこんなところに？ 例の団はどうしたんで？」

「あー、アレはちょっと都合があって辞めてきた。今はギルドで働いてる」

「へ、へえ。そ、それはそれは」

「まあ、そういうわけだ。…もう、なんとなく分かっていると思うが」

「…はい」

「どうする？ 抵抗するか？」

「………止めておきます。まだ、死にたくないですから」

「そうか、じゃあ手下連中はどうする？」

「…こいつらは多分抵抗するでしょう。…でも、殺すのだけは勘弁してくださいませんか？」

「まあ、いいぞ」

「…よろしくお願いします」

※※※

俺とバックカスの交渉が終わった後、バックカスが俺に投降することを手下達に言う、手下達は激怒した。

内容の殆どが俺を罵る言葉で、だが中には戦いもせずに投降する自分達の棟梁をも罵る言葉が聞こえた。

「……………」

バックカスはその声をじっと耐えるようにして動かない。

「くそっ！ 頭アンタには失望したよっ！ もういい！ アンタが戦わないなら俺が戦う！」

その様子を見て、血の気の多い手下連中が怒りに任せて俺に襲い掛かってきた。

まず、魔術師が氷の槍の魔術で俺の体を貫こうとする。

だが、

パリン！！

「うぜえよ」

「風ウウウウウウウウウウウツー―――！！！！」

瞬間、

山賊たちは空を舞った。

綺麗に、木の葉のように、空を舞った。

まるで、木の葉のようにヒラヒラと。

だが、木の葉のように綺麗に落ちる事はなく、「ぐはっ」「うげっ」とかあまり綺麗じゃない着地音で持つて落ちてきた。

中には馬にしがみついて何とか空を舞うことがなかった奴らもいたが、さすがに武器はどこかに吹き飛んだようだった。

もちろん、吹き飛んだ奴は武器どころではなく、自分がなぜ空を舞ったのか訳がわからないようだった。

俺はその様子を見ながら、言った。

「今の結構加減が難しいからこれ以上連発すると、死人がでるぞ。それでも、まだやるか？」

俺がそう言うと、山賊連中は顔を見合わせて叫んだ。

『勘弁してください!!』

—こうして、俺は山賊の棟梁であるバツカスと、その手下を捕まえて懸賞金をたんまりといただいた。

山賊（後書き）

ガルーの技の元ネタは三匹の子豚で狼がやるアレです。
威力も多分同じくらい？

レンガで造った家は壊せないと思います。

マジな戦闘はもう少したってからです。

ガチでキレたガルーに期待してください。

辻斬り（前書き）

ちよつとシリアルな話になっていくと思います。

辻斬り

山賊の棟梁を捕まえ、懸賞金をたんまりとギルドからいただいた後、俺はテレサの働く警備隊の屯所に袋一杯の金を持って向かった。

しかし、

「は？ テレサの奴いねえの？」

運悪く、テレサの奴は仕事で屯所にはいなかった。

なんでいないのか、屯所にいるほかの警備隊の人間に理由を聞くと、あつさり教えてくれた。

「急な仕事で同僚と一緒に現場に向かったよ」

「急な仕事？」

「ああ、例の『辻斬り』が出たんだよ」

「…なんだそれ？」

俺は詳しく話を聞いてみると、俺が山賊狩りをしている間に王都で『辻斬り』が出たらしい。

しかも、ただの辻斬りではないようだ。

とんでもなく、強く、また残虐な奴が現れたらしい。

その辻斬りには、もう何人も的一般市民が被害に遭い、被害者の中には女子供も含まれているそうだ。

そして、テレサが今この場にいないのは、その辻斬りの新たな被害者が先ほど発見されたので、その確認と捜査のためらしい。

俺はその話を聞いて納得した。

「なるほどな、だからテレサの奴はいないのか」

「そういうことだよ。」

「それにしても、随分と物騒な話だな」

「ここは王都なんだから、これだけ人がいれば悪事や人殺しは珍しくないよ」

「…そういうもんか」

「そういうもんだよ。…ところでどうする？　まだ彼女はしばらくここには帰ってこないと思うよ？」

「あー、そうか。じゃあ、また別の日にくるわ」

「そうか。一応、あんたが来たことは話しとくよ」

「頼んだ。ああ、ついでに、その辻斬りには気をつけろって言うておいてくれ」

「わかったよ。あんたも気をつけてな。」

「まあ、考えておくわ」

俺は屯所にいた若い隊員に向かって軽口を叩きながら、屯所を後にした。

：後になって、思えば。

この時、

その辻斬りとテレサが遭遇する可能性について、もっと頭を働かせるべきだった。

警備隊の任務には夜間の見守りなんてものがあって、テレサがその任務に就く可能性だとか。

女子供を斬る非道な辻斬りの行いを、気の強いテレサがどう思ったのかとか。

他にも、色々考えるべきだった。

特にあの「笛」についても、あの時もっと詳しく話しておくべきだったんだ。

：だけど、もう遅い。

…俺がテレサに会うのは、この次の日だ。

…それまで俺とテレサは街で会うことも、道ですれ違う事もない。

…だから、この次の日の朝。

俺は、病院の病室で体中包帯でぐるぐる巻きにされた、まるでミイラのようなテレサと会うこととなってしまったんだ。

※※※

運悪く、夜間の見回りで例の「辻斬り」に会ってしまったらしい。

警備隊の同僚も二人いたらしいが、全く太刀打ちできず、体中をロボロにされた挙句に逃げられてしまったらしい。

片足にギブスを嵌めて松葉杖を突いた、テレサの同僚がそう教えてくれた。

そして、教えてくれた。

テレサが何故こんなミイラのような状態になってしまったのかを。

理由は単純だった。

テレサが諦めなかったからだ。

あいつは最後の最後まで、戦ってしまった。

腕や足を折られ、体中を切り刻まれても、剣を手放さなかった。

だから、だ。

だから、辻斬りを楽しませてしまったんだと、テレサの同僚達は教えてくれた。

「あの辻斬りは、腕を折られても向かってくるテレサを見て楽しそうに笑ってやがった…！」

「…あいつは遊んでたんだよ。何度も立ち上がっては向かってくるテレサを見ておもしろいと思っただけだ…！」

悔しそうにそういうテレサの同僚達だって、軽症とはいえない怪我を負っている。

こいつらだって必死に戦ったのだろう。

だが、実力の差がありすぎて辻斬りは楽しむことはできなかった。

だから、こいつらはテレサに比べると比較的軽症ですんだのだろう。

…そして、逆に辻斬りを楽しませてしまったテレサは…。

「……………」

利き腕は折られ、足も左足は折られ、右足はひびが数箇所入っている。

そして、顔や頭には地面に打ちつけた痣やこぶが多数あり、切り傷はもう数え切れないほどある。

幸い、今後の生活に支障をきたすような致命的な傷はなかったものの、重傷には違いない。

「……………スウスウ」

今は鎮静剤と睡眠薬のおかげでやすらかに眠っているが、逆にその対応はどれだけその傷が酷いのかはつきりわかってしまう。

俺はその姿を網膜に焼き付けながら、テレサの同僚達に聞いた。

どんな奴だった？

「…！」

俺の言葉を聞いた瞬間、テレサの同僚達が怯えるのがわかった。

だが、そんなことはどうだっていい。

俺は怯える彼らから情報を出来る限り聞きだした。

そして俺はテレサの同僚達に頭を下げて礼を言った後、病院の医者に袋一杯の金を渡して、病院から出た。

そして、病院の外で待っていたルースと合流した。

「…どうでしたガル！。テレサさんの容態は…」

「重傷」

ルースの質問に、俺は単語で答える。

「…！ まさか命の危険があるとかは…！」

「大丈夫だ、それはない」

「それは、よかった…！ ホッとしましたよ…」

「……………」

「…これからどうするつもりですか？」

「……………」

「…例の辻斬りは『生死問わず』の賞金首になりましたよ」

「……………」

「…突然話は変わりますが、今夜は『満月』ですね」

「……………」

「私の力を使って、ある程度の範囲を人払いしましょう」

「……………」

「……………ガルー。」

ピタッ

俺は一度立ち止まり、ルースの奴に礼を言った。

「……悪い」

「……いいえ、どうか気にしないでください」

俺の礼を受け取り、ルースは頷いた。

「……………」

俺はそれを見た後、再び歩き出した。

グツグツと、腹の中で何かが煮える音が聞こえる。

もう、一つのことだけしか考えられない。

殺したい。

ぐちゃぐちゃになるまで殺して、殺して、殺してやりたい。

体がなくなるまで、殺し尽くしたい。

殺したくて、殺したくて。

もう、堪らない。

一秒でも早く、俺は。

「殺したい……！」

頭の中で何度もテレサをあんな目に遭わせた辻斬りを殺し続けながら、俺は街を歩いた。

辻斬り（後書き）

ぶちキレ中のガルーです。
問題なければ次で戦闘。

戦闘開始（前書き）

自分、酷い話書いてるほうが書くスピード早いです。
復讐とか絶望とか挫折とか、書いてるとすごく楽しい。
……もしかして自分って、かなりやばい？

戦闘開始

王都の夜。

とある人気のなくなった酒場で、俺は酒場のカウンターに座る「そいつ」に声をかけた。

いや、声をかけたというよりも、宣告したと言ったほうがよかったかもしれない。

俺はそいつに向かってこう宣告した。

「死ね」

ボッ！！

宣告とほぼ同時に蹴りを「そいつ」の背中目掛けて放った。

「ッ！！」

だが、「そいつ」は俺の蹴りを椅子から転がり落ちるようになして避けた。

そして、

「…一体、なんのつもりだ？」

そう言って、俺の攻撃を避けた「そいつ」はゆっくりと身を起こし

た。

「…………。」

俺は「そいつ」の格好を改めて確認した。

背丈は170ほどで比較的細身の男。

服装は大陸の人間の服ではなく、東国風の丈の長いヒラヒラしたもの。

男のくせに髪が長く、頭の後ろで馬の尻尾のように紐で縛ってある。

そして、男が腰に持っているかすかに湾曲した細長い物体。

すべて、テレサの同僚から聞いた話と一致する。

そしてなにより、男が腰の持っている物体からは「匂い」がする。

動物やモンスターの血とは違う、人間の血の「匂い」が。

俺はそれを確認した後、「そいつ」に向かって言った。

「てめえを殺す」

「…ほう、拙者の正体がわかるか。ふむ…。これはちと、斬りすぎってしまったか」

「状況がわかってるなら話が早えな。ならさっさと、…死ねっ!」

言葉と同時に距離を詰め、右足で「そいつ」の首を狙った。

「ふっ!!」

だが、「そいつ」は俺の蹴りを身を反らすことで避け、今度は腰に持った獲物で俺を攻撃してきた。

一閃

まるで、閃光のような一撃が俺の蹴り足に向けて放たれた。

閃光と俺の蹴り足がまるで交差するように交わろうとするが、俺は蹴りの軌道を無理矢理変える。

「っらぁ!!」

俺は足の踵を曲げ、閃光に向かって踏む潰すように足を振り下ろした。

ガキンッ!!

俺の足と閃光が交わり、金属音が酒場に響いた。

※※※

「…それが、てめえの獲物か」

俺は自分の鉄靴の先にある、「そいつ」の獲物を見た。

変わった刃物だった。

細長いくせに、妙に身が厚い。

おそらく、東国の戦士が使う「刀」というものだろう。

「…驚いた。拙者の初撃をこのようにして防ぐとは…」

「……うるせえぞ、辻斬り」

「…ふむ。もしかして、お主は拙者が斬った奴らに縁のある者か？」

「…だったら、どうしたよ」

「ふふっ。「試し切り」のついでにお主のような手練が現れるとは嬉しい限りだ」

「…今、なんつった？」

「試し切りと言ったのだ。この名刀の」

そう言って、顎で俺の足と鏢迫り合いをしている指す辻斬り。

そして、そのまま話し続ける。

「この刀は、大陸に渡った拙者の国の鍛冶師が大陸の鉱石を使って作った刀でな。実に不思議な「力」を持っているのだ。

だが、その「力」を使うには少し「慣れ」が必要でな。少し、この街の人間に協力して貰った」

「……………」

「おかげで、随分この刀に慣れることが出来た。これで拙者は…」

「黙れ…」

「ん？」

俺はべらべらと喋るクソ野郎に向かって、黙るように命令する。

そして、

ガッ!!

足で弾くそうにして辻斬りの獲物を蹴り、辻斬りから距離をとった。辻斬りも罅迫り合いから開放されることを望んでいたのか、再び距離を詰める事はしなかった。

そして俺は辻斬りと距離をとり、辻斬りに殺気を込めてこう言った。

「本気で殺す」

「……………」

俺の台詞を聞いた辻斬りは、黙って俺の事を見た。

その目からは先ほども喋り続けていた時の余裕はなかった。

おそらく、俺の本気の殺気を感じ取ったのだろう。もう無駄口を叩く余裕はなくなったようだ。

スウッ

「……………」

俺はその様子を見ながら、ゆっくりと右腕を前に突き出した。

そして、その状態で「ある言葉」を呟いた。

『右腕獣化』

その瞬間、俺の右腕は怪物の腕へと変わった。

右腕は肩口から手の指先にいたるまで、黒い毛皮が生え、その腕は膨張した筋肉で服を突き破った。

「!？」

その様子を見ていた辻斬りは驚きの表情を見せるが、俺はさらに、今度は左腕を前に突き出した。

スウツ

そして、右腕と同じように、また言葉を呟いた。

『左腕獣化』

すると、左腕も右腕と同じように怪物の腕へと変わった。

「…………。」

グッ！グッ！グッ！グッ！

何度かその怪物の手で拳を握り感触を確かめる。

そして、

「ブチ殺す」

俺は怪物の両腕で拳を構え、改めて辻斬りと対峙した。

※※※

人狼族と呼ばれる獣人族がいる。

彼らは総じて身体能力、もっと言えば戦闘力が高い。

だが、彼らが本当の力を発揮するのは「人狼化」した時だ。

彼らは「人狼化」と言う、半狼半人の狼の顔を持った怪物のような姿に変わることが出来る。

この姿の状態の彼らは極めて強力で、まず歯が立たない。

そして、満月の夜。

この日、もし人狼族に戦いを挑む人間がいるならば、そいつはよほどの馬鹿者か自殺志願者のどちらかだろう。

彼らは満月の夜、無敵になる。

おそらく、単体で下級の竜すら圧倒する事が出来るだろう。

その理由は、おそらく対峙すれば嫌という程に理解できる。

—今まさに、王都に現れた殺人者がそうだというように。

※※※

閃光の様な斬撃が走る。

何度も何度も、ガルーの体を辻斬りは刀で斬るが、それは全く効果がなかった。

すべて、ガルーの怪物の様な両腕に阻まれる。

見た目はただ毛皮の生えた腕だが、それはとんでもない勘違いだ。

まるで、鋼鉄の毛皮。

腕を斬るどころか、毛の一筋すら斬る事ができない。

むしろ、斬っているこちらの刀が駄目になってしまうのではないかと思うほどに、強固な腕だった。

それを感じた辻斬りは一度距離をとった。

「…これが、大陸の魔術というものか。…なんと強力で面妖な」

そう言った辻斬りの表情は苦虫を噛み潰したようだった。

それに対して、ガルーは表情もなくこう言った。

「そんなちゃんけなもと一緒にするな。これは『自前』だ」

その言葉に辻斬りは不思議そうに聞き返す。

「自前だと？ まさか、お主人間ではないのか？」

「あいにくと、俺は人狼だ」

「なんと、畜生の類か」

「…なんだと？」

自分の種族を畜生呼ばわりされたことに怒りが増すガルー。

そして、瞬間。

ガルーの攻撃が始まった。

「殺す…！」

※※※

ガルーの怪物のような手にはするどい鉤爪が生えており、その爪が辻斬りを襲う。

辻斬りはそれを持っている刀で防ごうとするが、斬撃は毛皮に阻まれ効かず、徐々に距離を詰められていく。

そして、ついに壁際まで距離を詰められた。

「くたばッれ…！」

それを見たガルーは拳を辻斬りの顔面に向けて放った。

ガンッ…！！

「ぐッ…！」

拳は辻斬りの顔面に入り、辻斬りは壁に激突した。

だが、辻斬りは殴られた瞬間に顔を思いっきり捻り拳の威力を逃が

していた。

そのせいで首が吹き飛ぶ事はなく衝撃で吹き飛ぶだけで終わった。

「…なんて奴だ。その腕の防御力にこの臂力だと？ …怪物め」

「うるせえ。黙って殺されろ」

「…それは、御免こうむる」

そう言って、壁に激突した辻斬りは壁に背を預けながら立ち上がった。

だが、足にキているのか、ガクガクと足が揺れている。

「…………。」

それを見てガル―は足を振り上げた。

ガッ！！

「ぐはッ！！」

ガル―は辻斬りの鳩尾に蹴りを入れた。

そして、蹴り足を腹から引くことはせずそのまま足で壁に押し付けて辻斬りの体を壁に縫いとめる。

まるで、標本の昆虫のような状態の辻斬り。

手にはまだ刀を持っているが、それはガルーの両腕には効かない。

また、腕以外の場所を斬ろうとしても、壁に縫いとめられた状態では斬撃を放ったとしても防がれてしまう事だろう。

それが分かっているガルーはただゆっくりと足に力を込めていった。

「……………」

「ぐっ…！　があっ…！」

グッ！　ググッ！

まるで、虫を足で潰すように足で腹を踏みにじるガルー。

このまま続けていけば、内臓がつぶれるか砕けた骨が内臓に突き刺さる事だろう。

いや、もしかしたら足が腹を突き破るかもしれない。

それほどに執拗な行動だった。

「……………」

それをガルーは、無表情にただ淡々と続けていた。

人の腹を突き破らんばかりに腹を踏み続ける怪物の腕を持つ男。

彼がしている事は辻斬りという殺人者に相応の報いを受けさせているだけなのだが、

その姿はまるで悪魔のようだった。

足りない(前書き)

短いです。

足りない

「ぐああ…！、があっ…！」

「……………」

グリイツー！！

辻斬りは、自分の腹を圧迫し続けるガルーの足から身をよじって逃げようとするが、ガルーは足に力を込める事でそれを阻止する。

これにより、辻斬りはさらに苦しむ事になった。

「ツ~~~~~~~~！！！」

辻斬りは言葉を発する事が出来ないほどに苦しみ、悶絶する。

「…………ちっ」

スウツ

その様子をガルーは無表情に見ていたが、何を思ったのか突然、辻斬りを押さえつけていた足を退けた。

「ガハッ…！ ハアッハアッハアッ」

壁に足で押さえつけられていた辻斬りは突然の解放に驚きながら、痛む腹を押さえながら深く呼吸を繰り返した。

そして、辻斬りは呼吸が落ち着くと顔をあげた。

すると、

「ッ……!!」

「……………」

そこにはまるで自分が落ち着くのを待っていたかのように、じっとこちらを見ているガルーの姿があった。

※※※

「……これは、一体、何のつもりだ？」

そう言って腹を押さえながら立ち上がった辻斬りの目には怒りが宿っていた。

辻斬りはガルーの行動にプライドを傷つけられ、今にも飛び掛かりそうだった。

だが、その姿を見たガルーはただ淡々と言葉を返した。

「足りない」

「…それはどういう意味だ？」

ガルーの言った言葉の意味が分からず聞き返す辻斬り。

だが、それにガルーは答えない。

それどころか、逆にガルーは辻斬りに質問をした。

「苦しみが足りない」

「…なに？」

突然のガルーの言葉に少し面食らう辻斬り。

だが、そんな辻斬りの様子などお構いなしにガルーは話し続けた。

「あいつが苦しんでるのに、何でお前が苦しんでないんだ？　なん
でお前の腕も足も折れてない？　体に傷がついていない？」

「…………。」

「なんでお前はそうして平気で立ってるんだ？　…あいつは傷だら
けなのに、何でだ？」

「…………。」

「お前は、もっとボロボロになるべきだろ？　もっと惨めに地面に

「這い蹲るべきだろ？」

「……………」

「こんな事ぐらいでくたばるなよ。もっと、もっと、苦しめよ。」

「お主、まさか…」

そこで、辻斬りはガルーが自分を解放した理由を理解した。

辻斬りはガルーのことを怖れるようにして見た。

「…なあ」

ガルーはさらに喋り続ける。

言葉に抑えきれない怒りを、目に殺意を込めて、辻斬りに向かって喋り続ける。

「何で、お前生きてるんだよ」

辻斬りはこの時確信した。

ガルーが手を抜いたわけでも、遊びで自分を解放したわけではないという事を。

「イラつく。テメェが生きてることも。息吸って、そうやって立っていることも…全部が全部」

目の前の男は、おそらく。いや、間違いない。

「我慢、できない」

自分を罅り殺しにするつもりなのだということを。

牢獄（前書き）

ちよつと、ガルーの強さを第三者に話してもらいたくて書きました。

牢獄

場所はパンゲア王国にある、とある牢獄。

そこには、つい先日ガルーが捕らえた山賊の棟梁であるバツカスとその手下達が捕らえられていた。

そして、そこで彼らは何かを話していた。

「棟梁、あのガラの悪い男はなににもんだったんですか。棟梁、知り合いみたいでしたけど」「あー、それは俺も気になってた」「俺も俺も」「つーか、あいつ強すぎでしょ」「もしかして、棟梁が傭兵だった頃の仲間？」

どうやら、彼らは自分達を捕らえたガルーの素性について自分達の頭に話を聞こうとしているらしい。

「…ああ？」

だが、話を催促されたバツカスはまるで苦虫を噛み潰したような顔をしている。

だが獄中は余程暇なのか、頭をボリボリと掻いた後にすごく嫌そうな顔で話した。

「あの人は人狼だよ」

「「いッ!?!」」

その言葉を聞いた手下達は自分達を捕らえた男が正体を知って驚いた。

そして、口々に手下同士で話を始めた。

「人狼って、狼の獣人でしょう!？」「獣人って、闇で変態貴族の奴隷とかになってるから弱いんじゃないんですか!？」「いや、猫や兎の獣人はそうかも知れないが、狼は違うんじゃないのか?」「たかが獣人のくせになんであんなに強いんだよ!」

牢の中で騒がしくし始めた手下達を見て、このままでは看守がやってきてしまうとバツカスは自分の手下達に冷水を浴びせることにした。

「…お前ら、ウルフヘジンって知ってるか?」

「「へっ? ウルフヘジン?」」

「人狼族の戦士団。半端なく強い化物集団なんだが…、知らないのか?」

「「…はい」」

「…俺たちを捕まえたガルーって人がその一員なんだが…。こいつらはマジで『ヤバイ』ぞ」

「ど、どうやばいんですか?」

「まず、敵としてあったら間違いなく死ぬ」

「「えっ…?」」

「一人ひとりが下級のドラゴンを殺せるぐらい強い。さらに、仲間意識も強くてモラルも高い」

「「…へ、へえ」」

「こいつらは、主にモンスター殺しの戦闘集団なんだが。他にも他国に売られた獣人を助けたりもする」

「「へ、へえ……」」

「あと、キレさせると本気でヤバイ。特に、今のお前達の話聞かれてたらマジでヤバイ」

「「へっ…?。」」

どこか遠い目をして話す自分達の頭を見て、困惑する手下達。

だが、そんな手下達の様子など気にせずにはバツカスは話し続けた。

「奴らはプライドが高い奴が多いからなあ。自分達の一族を馬鹿にする言葉を聞いたら、言った奴らはまず半殺しにされるなあ」

「「…………。」」

「…仮の話だが、闇競売であいつらの仲間を一人でも競売にかけてみる。…参加した奴ら全員死ぬぞ」

「「いっ…!?!」」

「人狼は仲間意識も強いからな。人身売買や奴隷市に仲間が売られたと話を聞いた瞬間に、一族総出で殺しにくるぞ。」

「「……………うわぁ」」

バツカスの言葉を聞いた手下達は顔を青ざめさせた。

まさか、人狼族がそんな危険な奴らだとは知らなかったからだ。

そして、そんな顔を青くする手下達を見てバツカスは最後の忠告をした。

「だから、あいつらを馬鹿にしたり害を与えるような事はするなよ？」

「…もし、やったらどうなります?」

「楽に死ぬるように祈っとけ」

「「……………。」」

「言っておくが、俺たちが捕まった時は特別だ。普通だったら俺らはここで息してない。お前ら、俺があの人と知り合いでホントよかったな」

「あの人、そんなにヤバイ人だったんですか!?!」

「…まあ、ヤバイな。怒らせたら、同じ人狼族でも手が負えないみたいだ」

「どんだけ強いんですか!?!」

「同じ年の人狼三人を、フルボッコにするぐらいだな。もちろん一人で」

「さっきの棟梁と今の話をくつつけると、下級のドラゴンを一人でフルボッコに出来るってことになるんですけど!?!」

「あの人ならそれぐらい出来るな」

どこか納得するように首を縦に振るうバツカス。

それを見た手下達は顔を見合わせ、さらに顔を青ざめさせた。

だが、そんな中。

「あの一、棟梁」

「ん? どうした?」

手下の一人がバツカスに恐る恐る質問した。

「…もしそのガルーって人怒らせたらどうなります?」

「ん? そりゃお前、簡単だよ」

「…というと?」

手下の質問にバックスは答えた。

「お前ら、ドラゴンがキレたら周囲の物はどうなる？ 特に、ドラゴンに怒らせた奴の末路なんて子どもだってわかるだろ？ つまり、そういうことだ」

「……………」

その言葉に手下達は顔を引き攣らせ、自分達の心に絶対にしてはいけない事を刻み込んだ。

そんな自分の手下を見ながら、バックスはポツリと呟いた。

「…まあ、余程の馬鹿じゃなければ、あの人を怒らせないだろ。普段は、めんどくさがるのチンピラみたいな人だしな」

だが、そんな事をつぶやくバックスは知らない。

話の当人であるガルは今、完全に「ブチ」キレており、怒りの対象である異国の剣士と死闘を繰り返している事を彼は知らない。

もし、知っていればバックスはどんな手を使ってでも脱獄を試みただろう。

牢獄（後書き）

亜人（ドワーフ、エルフ、マーメイド、獣人、竜人、など色々な種族）

獣人（人狼、ワーキャット、その他色々な動物の獣人。獣と人の中間みたいな奴らは全部ここに分類します）

適当な分類で申し訳ないです。

意味がない

「魔剣」と呼ばれる武器がこの世にあり、辻斬りが持っている刀も「それ」に属する。

遠距離にいる相手だろうが致命傷を与える事が可能な、かまいたちを起こす風の「魔剣」だった。

辻斬りはその力を試すために何度も人間で試し切りをしてきた。

何度も人を斬る事で魔剣は手になじみ、そして、その力を完全に扱えるようになったと辻斬りは確信していた。

だが――

それはガルーの前では意味がなかった。

※※※

風の刃が男の体に直撃する。

だが、男はそんな攻撃を意にも介さずに自分に向かって歩いてくる。

ゆっくりと、ゆっくりと。

まるで、自分の攻撃などなかったかのように平然と歩いてくる。

風の刃は確かに男に当たった。

傷もつき、血も流れている。

だが、意味がない。

風の刃でついた傷など、この男には意味がない。

なぜなら――

自分がつけた傷は、次の瞬間にはもう塞がってしまうのだから。

ありえない早さで完全に傷はなくなる。

その光景は不気味としかいいがない。

そして、その光景を見てやっと自分は気がついた。

「化物」に、こんなものが効くはずがないことに。

そこから、地獄が始まった。

※※※

「死ねッ！！ 死ねッ！！ 死ねえッーーーー！！」

「……………」

辻斬りの剣は魔剣の類だったらしく、何度も見えない刃が俺の肌を斬った。

さすがの俺も魔力を帯びた「力」には傷を負う。

初めはそのことに薄ら笑いを浮かべていた辻斬りだったが、しばらく攻撃が続けていると顔を驚愕で歪めた。

「どういうことだッ!？」

「……………」

辻斬りは気がついたようだった。

血が流れたのは傷を付けられた一瞬だけで、それ以後は全く血が流れていないことに。

これは人狼の力の一つだ。

あり得ない早さでの「回復力」

どんな深手を負おうとも、人狼の体は次の瞬間から回復が始まる。

そして、辻斬りが見えない刃でいくら斬りつけられようが、臓器までは届かない。

ならば、辻斬りは俺の体に致命傷を負わせることは出来ない。

俺はそのことを辻斬りに確認させると、辻斬りが放つ「見えない刃」を受けつつ、辻斬りの目の前に立った。

そして、

「くたばれ」

その言葉と同時に、右拳を辻斬りの鳩尾に深く入れた。

「ぐえッ!？」

「……………」

辻斬りのくぐもった悲鳴を聞きながら、俺は辻斬りを殴り続けた。

まず腹を殴り、骨を砕き、内臓を潰した。

そして、それに悶絶して床に転がる辻斬りを、俺は蹴りつづけた。

腹や背中はもちろんのこと、顔や股間も何かがつぶれるまで蹴り続けた。

その間、辻斬りはあまりの痛みに悲鳴も上げられず、ただ呻き声をあげるだけだった。

そして、辻斬りが呻き声をあげることも出来なくなると、俺は辻斬りの手を踏み碎いた。

爪を碎き、骨も甲の部分から指の先端まで碎いた。

手が碎けたことを確認すると、俺は足をどけて、今度はもう片方の手を同じように踏み碎いた。

気がつけば、いつのまに辻斬りは虫の息だった。

だが、俺はそれが気に食わなかった。

顔を掴み、少しだけ足をばたつかせる辻斬りを壁に押し付ける。

「まだ死ぬな。本番はこれからだ」

そして、俺は辻斬りの鼻が潰れた顔を手で鷲づかみにしながら、酒場から外に出た。

意味がない（後書き）

別の作品が書けなくて、リハビリ目的で書き始めた作品ですが、何か感想をもらえると嬉しいです。

特に、読みにくかったり意味がよくわからないところがあったら教えてください。

改善できるように努力します。

変貌

俺と俺に顔を掴まれた辻斬りが酒場の外に出ると、外にはルースがいた。

「……………」

そして、俺はルースに向かって一言。

「…やってくれ」

「わかりました」

俺の言葉と同時に、ルースが俺に手のひらを突き出すように向けた。ルースの手のひらからは魔術師が使う魔術陣が展開され、俺に向かって放たれようとしている。

だが、それは俺を攻撃するものではない。

「場所はこちらから大分離れた森の中です。…そこならば存分に暴れます」

「…わりいな」

「いいえ、気にしないでください。…気持ち、わかりますから」

「…そうか」

「はい…」

「…そろそろ、『運んで』くれ」

「はい、わかりました…」

ルースはそう言って、手のひらにあった魔術陣を俺に向かって放った。

ボウツ！！

放たれた魔術陣は俺の周りを囲み、俺は魔術陣で四方を囲まれた。

ルースはそれを確認すると、何か集中するように目を閉じる。

そして、

『転移せよ』

そう俺に向かって呟き、俺をある場所に『運んだ』

―王都から離れた森の中―

「…さすがルース。こんな森の中に一発で転移させるか…」

『転移魔術』と呼ばれる、ある一定の場所から場所に特定の物や生物を転移させる事ができる上級魔術がある。

これには術者の能力によって、距離や転移させる物の重量などが制限されるのだが、ルースはその魔獣で男二人を王都から

離れた森の中にやすやすと運んだ。

それはルースが一流の魔術師である証明なのだが…、

しかし、そんな事は今のガルーにはもうどうだって良かった。

今は、ただ…

「やっと暴れられるな。街は人も物も多すぎて駄目だ。『本気』が出せない」

「…あ、…ああ」

「俺は言ったよな？ 『本気で殺す』って」

「うあ…！ うああ…」

ガル―が手で顔を掴んでいる辻斬りから何か怯えた声が聞こえ始めた。

辻斬りが怯えているのは、一瞬で知らない場所に飛ばされた事への恐怖でも、自分の体に走る激痛からでもなかった。

ガル―はそんな怯える辻斬りに顔を近づけながら、ささやくような声で訊ねた。

「…なあ、人狼の本当の姿を見たことがあるか？」

「あ…ああ…？ いあ…！」

だが、辻斬りは言葉を返すことが出来ない。

鼻だけではなく、歯も砕かれているので口の中がぼろぼろで喋る事ができないのだ。

しかし、喋れない理由はそれだけではない。

「うああ…、うあつ……」

「…聞いても意味がなかったか。…まあいいか」

そう言って、辻斬りを冷たく見下ろすガル―。

「ひい……ひい……！ ひい……！」

そしてガルーは、怯える辻斬りを見ながら最後の会話を交わした。

「ただ、よく『見て』おけ」

そう言って、ガルーは「人狼」へと変わった。

ザワリッ！！

まず、顔が人のそれから獣それに変わった。

黒い体毛が全身から生え、鋭い犬歯と鉤爪が伸びた。

全身が強靱な筋肉に覆われ、一回り以上も大きくなった。

そして、今までガルーが立っていた場所に黒い狼の怪物が現れた。

「ツーーーーー！！！！」

それを見て、辻斬りは堪えらず悲鳴を上げた。

辻斬りは、目の前で変貌していった怪物に恐怖した。

「ああ……！ ああ……いあ……！」

そして、さらに何か声を上げようとしたが、…それよりも早く。

「……………」

「ひっ…！」

人から獣へと変わった怪物が……、

まるで、憂さを晴らすように。

何度も何度も。

無言でその鋭い牙と爪で、辻斬りの体を引き裂いた。

牙で噛み砕き。

爪で引き裂き。

体の「形」がなくなってしまうまで、ただひたすらに。

『ぶち殺した』

変貌（後書き）

感想お待ちしています。

次回からは、今回の出来事でテレサに執着度が増したガルーが暴走する話を書いていくつもりです。（あくまで予定ですが）
でも、その前にお見舞いの話とか書きます。

病院（前書き）

今回短いです。

病院

私が病院のベッドで目が覚めたとき、一番に目に入っただのはガルーの姿だった。

ガルーは私のベッドのすぐ傍で面会者用の椅子に座り、腕を胸の前で組み顔を下に向けて寝ていた。

起きているときも不機嫌そうな顔をしていたが、寝ているときも不機嫌そうに眉をしかめて寝ていた。

だが何故彼が目の前にいて、何故私がこんな場所にいるのかと不思議に思った。

しかし、自分の体に巻かれた包帯を見た時、例の辻斬りと戦った事を思い出した。

：今の自分の状況から考え、私は辻斬りに病院送りにされた事がわかった。

そして、そのことからまだあの辻斬りは捕まっていないのだと考え、思わず体を起こそうとしてしまった。

すると、

ズキンッ！！

「痛っ…！」

体を起こそうとするその動作の途中、激痛で体が動かなくなった。

おそらく、これ以上体を動かせば全身に激痛が走り、悶絶することだろう。

だが、あの辻斬りのことを考えると、このままベッドで寝ていることは出来ない。

私は体中を走る痛みを歯を食いしばり、ベッドから起き上がろうとした。

―だが、それは止められた。

止めたのは医師でも看護師でもなく、先ほどまで不機嫌そうに寝ていたガルーだった。

「……………」

彼は無言で私のベッドに近づき、私の頭に手を置いた。

そして、

スッ

「…寝てろよ」

「え…」

私の頭に手を置いた彼は、普段の彼からは想像できないほどの優しい声でそう言った。

彼の口から聞こえたのは、まるで病気の子どもを心配する親のような信じられないほど優しい声だった。

私がそのことに驚いていると、彼は私の頭に手を置いたまま続けた。

「…お前、頑張ったよ。こんなにボロボロになるまでよく頑張ったよ」

そう言いながら、小さな子供にするように私の頭に置いた手で私の髪を撫でる。

「…でも、疲れただろ？　だけど、もう大丈夫だから。お前が心配するところは何もないから…、大丈夫だから」

そう言って、私の頭を優しく撫でるガルー。

そのままゆっくりと私の体をベッドに戻す。

そして、彼は私をベッドに横たわれせながら優しく囁く。

「…だから、安心して寝てろ」

私は驚きで固まったまま病院のベッドの上で彼を見た。

黒ずくめの服に黒い髪を白い紐で無造作に縛った青年。

紛れも無くガルーだ。

間違いない。

だが、普段の彼と決定的に違う。

普段の彼はぶっきらぼうでいつも不機嫌そうだ。

なのに、今はものすごく優しい。

まるで別人のようだ。

「ガ、ガルー？」

「ん？」

「…あの、どうして」

私はそのことが不思議で仕方なく、その理由を聞こうとした。

「…あれ？」

だが、その前に急激な睡魔に襲われた。

まるで、体が無理矢理休ませようとするかのように強制的に意識が閉じられていく。

だが、閉じられていく意識の中で彼の顔を見ようと、目を何とかして開けた。

（あっ…）

彼の顔を見た時、私は実に恥ずかしいことを考えてしまった。

彼がこんなに優しくしてくれるのは、私が心配だったのではないかと。

ガルーの顔を見て、そんな少し自意識過剰なことを考えてしまった。

だって、そんな事を考えてしまうほどに。

—ガルーの顔が優しかったのだ。

退院後の職場で

私が辻斬りに襲われてから、一ヶ月半後。

私は退院した。

襲われたときに出来た傷は、今はもうほぼ完治した。

入院した当初はかなりひどい状態だったが、医師や治療魔術師の人達のおかげで今はとても元気だ。

傷跡が残ったりするかなど心配もしていたが、医者や治療魔術の人がかなり腕が良かったのか、入院する前と殆ど変わらない肌となった。

おかげで襲われてから一ヶ月半後の今日。

私は退院することが出来た。

…だがしかし、私には問題があった。

…実は私は今ガルーに借金をしているのだ。

今回の怪我の治療費だが、ガルーが勝手に医者にお金を渡したらしく、私はそのお金で最高の治療を受けていた。

初め、そのことを聞いたときは驚いて、私は彼にお礼を言おうと思っていたのだが、ガル―は『あの日』以来全く見舞いに来ることはなかった。

立て替えてくれたお金を返さなきゃいけないのに、本当に『あの日』以来全く顔を見せなくなった。

代わりに、ル―スさんはよくお見舞いに来てくれた。

彼は本当によく気がつく人で、入院中の暇つぶしに面白い本を何冊も持ってきてくれた。

私はル―スさんにガル―の居場所を聞いてみたりもしたのだが、ル―スさんは「退院すればすぐにわかりますよ」とにこやかに笑って答えてくれない。

そして今日、私はガル―に治療費を立て替えてくれたお礼を言えずに退院した。

「…とりあえず、職場に明日から書類整理でもやらせてもらえるように頼もう」

どこにいるかわからない男を捜すよりも、まずは自分の生活をなんとかするために私は自分の職場に歩き始めた。

そして、ありえない場所でガルーを見つけた。

「よう、久しぶり」

「……………」

私は目に前にいるガラの悪い男を見て、驚きで声がでなくなった。

場所は私の職場である、警備隊の屯所だ。

そこは数人の警備隊の人間がいつもいて、書類整理や事件の報告書などをまとめている。

机が四つほどあって、その中の一つに見慣れた男が座っている。

そこにいたのは、私が入院中ずっと会おうと思っていた、目つきの悪い、黒ずくめ男だった。

というか、ガルーだった。

私はその姿に声も出せないほど驚いていると、ガルーがとんでもないことを言った。

「言ってなかったけど、俺ここで働くから」

「はあっ!？」

私はその言葉にやっと声が出せるようになった。

しかし、病み上がりか混乱しているからか、言葉がまとまらない。

「な、なんで!　だ、だってあなた!　ギルドで、し、仕事」

「あー、ギルド?　別にあれは兼業でも構わないみたいだから、大丈夫だ」

「え、いや、だって、　ええ!？」

私は驚きで頭がぐちゃぐちゃしてきた。

私がそんな風に混乱していると、

「だって、こうでもしなきゃお前が今度無茶するとき止められない
だろ？」

ガルーが頭をかきながら少し困った顔でそう言った。

「!？」

私はその言葉を聞いて、「まさか…！」と思った。

もしかして、この馬鹿は…！

私が頭の中で一つの仮説が浮かび上がった。

（私が怪我したから、警備隊に入った…!?!）

あまりにも馬鹿げた考えだと思ったが、このガルーという男の過去
を考えるとあながち間違いでもなさそうだった。

というか、多分そうだ。

私はそう考えて、再び驚愕で固まった。

一ヵ月後。そして、なぞの人影（前書き）

お久しぶりです。

これからの展開に悩んで更新が遅れました。
詳しくは後で活動報告で書きます。

一ヵ月後。そして、なぞの人影

ガル―がテレサに屯所で働くと言い出してから早一ヶ月。

本当にガル―はテレサと一緒に警備隊で働き始めた。

初めはそのことに難色を示していたテレサだったが、ガル―の仕事ぶりを見ているうちに徐々に何も言えなくなった。

驚くべきことにガル―は警備隊の隊員として優秀だったのだ。

どんな落し物でも数日中に見つけだし、揉め事が起きれば来ただけで騒ぎを止める。

喧嘩中の頭に血がのぼった奴らだろうが、舌打ちをして「ああ？」と睨んだだけで喧嘩を止める。

見た目はチンピラだが、外見に反して意外と優しいところがあり、街で迷子などを見つけると仕事をほっぽってめんどくさそうにだが助けに向かう。

―こんな隊員がいると近隣の住民が知れば、人気者になるのだろうが、ガル―は少し違った。

その理由は…テレサとの関係が原因だった。

ガル―は仕事はずっとテレサのそばから離れない。

見回りだろうが、書類仕事だろうが、四六時中そばにいる。

まるで従者のようにテレサの後ろを歩き、テレサが仕事で何かを頼むと猛ダッシュでその仕事を片付けて戻ってくる。

その姿は傍目には情けなく見えてしまい、近隣の住民達はガル―のことを優秀な隊員とは思えず、住民の中には「テレサの腰巾着」「金魚のふん」などと呼ぶ輩もいる。

そのせいで、ガル―はあまり住民にすごいと思われることはなかった。

彼らがもしもガル―の本当の強さを目にすれば、そのような考えなど二度と思いはしないのだが…あいにくとガル―が例の辻斬りを倒したこともわけあってあまり人に知られていないので、ガル―の凄さを知っている人間は王都には数えるほどしかいなかった。

※※※

「あー、くそ。あの猫、さんざん暴れやがって」

「それはあなたが鬼のような形相で追いかけたからでしょう？　きつと皮でも剥がされると思ったのよ」

「んなことしねえよ」

「じゃ食べられるとも思ったのよ」

「…お前は俺をどういう目で見てるんだ？　あ？」

ガルーとテレサは街の巡回の帰り道、話をしながら歩いていた。

話の内容は、先ほど捕まえた猫の話だ。

猫は住民の飼っていた仔猫で、屋根に登って降りられなくなったのをガルーが屋根に登って助けたのだ。

しかし助けたはいいが、猫はガルーに怯えたのかどうしたのか物凄く暴れて、ガルーの手や腕にひっかかり傷をつけた。

そのことでガルーは愚痴をこぼし、猫につけられた傷ごときでぐだぐだ言うガルーに向かってテレサがここぞとばかりにからかっているのだ。

「あー、くそ！　お前も一度は猫に引っ搔かれてみろ！　そうすれば俺の気持ち分かるから！」

「残念、私は猫と相性がいいから引っ掻かれるなんてことはありません」

「は？ 相性？ そんなもの関係あるのかよ？」

「あるわよ」

「はっ。そんなものあるわ……けが、………あるなあ。…うん」

「？ どうしたの？」

「…いや、お前の言うとおりだ。猫には相性がある。そして俺は相性が悪い。間違いない」

どこか遠くを見つめるようにしみじみとつぶやくガルー。

どうやら、何か心当たりがあるようだ。

「?？」

ガルーの考え変わりようにテレサは不思議がったが、そろそろ屯所の近くまでできていたので、深く追求せずにそのまま二人で歩き続けた。

——無言で歩き続ける二人。

その二人の様子を、実は遠くから見ていた人影がいた。

「……………」

…だが、その人影は何故か―

「…うつ。ホントにこんな所にいたあ。しかも、知らない女の人というう」

二人が一緒に歩いている姿を見て、肩を落としていた。

影から聞こえるのは高い少女の声。

声からは隠しようのない悲しみが溢れ、ときおり鼻をすする音も聞こえる。…どうやら泣いているようだ。

……暗殺者の類ではないようだが、何故か二人のことを恨みがましい目で見ている。

何故少女が泣いているかはわからないが、どうやら二人の内の片方とは知り合いらしい。

その証拠に時折、「ガル―さんの馬鹿あ…」とか「女たらしの不良狼」などと、ある人物のことを恨みがましくつぶやいている。

……少女が何者なのかはまだ分からないが、とりあえず敵ではなさそうだった。

一ヵ月後。そして、なぞの人影（後書き）

誤字と脱字の報告と感想をお待ちしています。

獣人の少女1（前書き）

短いです。

獣人の少女1

故郷で「ウルフヘジン」と呼ばれる戦士団に所属していた頃の話だ。

「ウルフヘジン」は他族から獣人を守るために出来た人狼族の戦士団で、その主な活動は他国にさらわれた獣人族の救出と村や集落をあらすモンスターの討伐だ。

当時の俺は戦士として、いくつもの密売組織を壊して同胞達を助けていた。

——そして、その助けた同胞たちの中に妙につきまとってくる奴がいた。

獣人族の中でも敏捷性に長けた「ケットシー」と呼ばれる一族で、檻の中で競売にかけられそうになっていたところを俺が助けた。

しかし、そのせいで妙になつかれた。

正直、子供の面倒など見たことがなくてどうしていいのか分からなかったが、そいつを里まで帰すまでは仕方なく俺が世話をしていた。

おかげで戦団の仲間達からはいいようにかわれた。

「足が痛い」と騒ぐのでおぶってやったり、「寒い」といってぶる震えているので「獣化」して湯たんぽの代わりになってやり、色々と世話を焼いてやった。

今思えば、よくあれだけ我慢して世話をしていたもんだと自分でも

感心する。

——さて、問題はここからだ。

俺は断言する。

このことに関して俺は感謝される覚えはあっても恨まれる覚えは全くない。

ましてや、どこぞのアホルースのように女で修羅場になるようなことは絶対はない。

それなのにどうしてだ？

「ガルーさんが嘔吐いたあ！ 私に嘔吐いたあ！」

「……ガルー？ この子あなたの知り合い？」

「……………」

「私のことお嫁さんにしてくれるって言ったのに、嘔吐いたあ！」

「お、お嫁さん？」

「…いや、言ってねえし」

「うわぁーん！ 昔の出来事なかったことにしようとしてるう
！」

「ガル、あなた…」

「……勘弁してくれ」

朝、警備隊の屯所で、久しぶりにあったそいつと見事に修羅場をつ
くっているのは……本当に何故だ？

獣人の少女1（後書き）

次はテレサ視点の話です。

獣人の少女2

「…相席していい？」

「え？ ああ、はい、どうぞ」

場所は早朝の大衆食堂。

私がそこで朝食の卵サンドを食べていると、小さな少女が相席を求めてきた。

私は断る理由もなかったので相席を許すと、少女は突然こういつてきた。

「…ねえ」

「ん？」

「あなたガルーさんの恋人？」

「ぶっ!!」

突然現れた少女の言葉に思わずむせた。

「な、なに言ってるのあなたは!？」

「別に：ただ確認したかっただけ」

目の前の少女はそう言って、私からそっぽを向いた。

「え、えーと、とりあえずあなたは一体誰？ それに確認って何？」

「私は」

先ほどのとんでも発言のせいで少し頭が混乱しているが、なんとか状況を整理しようと私は頑張った。

その努力が実ったのか、状況は少しずつ良くなっていった。

「何年かぶりにガルーさんに会いに行っただけど：ガルーさんいなくて、かすかな情報を手がかりにここまで来たの……」

「うん」

「でも、せっかく会えたと思ったのに、ガルーさんの隣に見たことのない女の人がいて……」

「……うん」

話を聞いているうちにすこしづつ分かったことがある。

少女はガル―の知り合いであり、名前はミーシャというらしい。

そして、このミーシャと名乗った少女はガル―に会うために王都にやってきたと話だ。

……どこかで聞いたような話だったが、とりあえずなんとかなく話の展開が読めてきた。

このミーシャという少女はガル―の恋人か何かなのだろう。

確か、ガル―は故郷を夜逃げしてきたはず。

それを追いかけてやってきたのだろう。

泣かせる話だ。

だが、私はそこでふと思った。

（というか、あいつに恋人とかいたんだ……）

考えてみれば、ガル―は20ちょっとの若い男で、恋人がいたって不思議ではないのだが……

「……………」

見た目がガラが悪いチンピラ風の男の姿を改めて思い出す。

そして、次にその男が恋人に甘い言葉をささやいている姿を思い浮かべる。

(…駄目。少女をかどわかしているチンピラのイメージしか浮かばない……)

そんな失礼なことを考えていると、ミーシャが私に語りかけてきた。私は気持ちを切り替えて、ミーシャの言葉を真剣に聞いた。

「テレサさん…だっけ？ 名前」

「え、ええ、そうよ」

「……あなたガルーさんの何？」

「え？」

「…ここ数日、あなたとガルーさんの様子を遠くから見てたけど…、やっぱり恋人にはみえなかった。…でも他人にも見えなかった」

「……えっと、それは」

「…………。」

「それは……」

私はミーシャの言葉に詰まった。

ただの命の恩人だと説明しようとしたが、何故か言葉が喉から外に出なかった。

「えっと……、私は…」

「っ……………！」

そんな私を見て、ミーシャは痺れを切らしたのか座っていた椅子から立ち上がった。

詰め寄ろうとしたのか、それとも私にはもう用なしだとばかりに店を出ようとしたのかわからないが、席を立とうとした。

だが、しかし――

「まあまあ、そんな怒らないで少し冷静になりましょう」

「!？」

「あっ…」

席を立とうとするミーシャを背後から肩を抑えるようにして再び座らせた男が現れた。

獣人の少女2（後書き）

次はルースの視点。

獣人の少女3

けだるい朝が一気に陽気な朝へと変わってしまった。

適当な店で朝食をとっていたら同居人の恩人がなにやら修羅場を作っている姿を目撃。

しかも、原因はどうやら自分の友人であるガルーその人。

（これは気配を完全に断って様子を探らなければならない）

そう思った私は、失礼だと思ったが、女性二人が座る席から少し離れた場所で彼女たちの話を盗み聞きすることを決めた。

だが話が山場を迎えた時、突然ミーシャという娘が椅子から立ち上がろうとしたので慌てて止めに入った。

折角見つけたガルーに関する揉め事。決して逃してはいけない。

何故ならこんな面白そうなことはめったにないからだ。

「まあまあ、そんな怒らないで少し冷静になりましょう」

※※※

私は一旦ミーシャをもう一度椅子に座らせた後、三人で話を始めた。

テレサさんとは知り合いだったが、ミーシャとは初対面だったので軽く自己紹介は済ませた。一応、ガルーとテレサさんの友人と説明した。

—そして、

「ミーシャさんでしたか？ 何故あなたはガルーとこちらにいらっしゃるテレサさんの関係にそんなご執心なのですか？」

「…昔、悪い奴らに売られそうになっていっところをガルーさんに助けられて…」

「…つまり、ガルーは恩人というわけですか？」

「…はい」

「ああ、それでガルーと仲がいいテレサさんにこうして話をしているわけですか？ 彼女が自分の恩人とどんな関係なのか気になって？」

「……はい」

「なるほどなるほど？」

思わず、テレサさんの方を見ながらにやけてしまった。

そして私はこの瞬間、面白すぎる人間関係が形成されていることがわかった。

ミーシャさんはガルーのことを恩人だと思っている。

またガルーはテレサさんの恩人だと思っている。

だが、ガルーの性格や、テレサさんの今までの様子を考えると、絶対「恩人」の方は助けたと思っていない。

いやなんとも面白い人間関係が築かれている。

しかも、その内一人は昔からの友人だ。

「……………」

私はこんな愉快的出来事はもっと盛り上げなければならぬと思い、ガルーが最も嫌がりそうなことをすることにした。

私は、ミーシャさんのほうに顔を向けて話しかけた。この時わざとテレサさんのことは無視するように視界から外した。

「それで？ 結論は出ましたか？」

「まだ、です」

「それはなぜですか？」

「この人が、はっきりしなくて……」

「まあ、本人からは少し言いにくいかもしれませんがね」

「……うつ。」

「なんなら、もう一人の当事者から聞いてみてはどうですか？ あ
つちならはつきりと言うと思いますよ」

私がそう言うと、それまで会話に参加していなかったテレサさんが
「ピクッ」と肩を揺らして反応した。彼女も気になっているらしい。
自分がガルーからどう思われているのかが、

そこから先は簡単だった。

元々、二人の関係が気になっていたミーシャさんと、自分がガルー
にどう思われているのか気になるテレサさん。

後は簡単だった。

二人の女性の様子を見ながら、適当に二人を刺激するような言葉を選
んで言ってしまう。後は二人が自分で行動を起こした。

しばらくすると、二人は覚悟を決めて椅子から立ち上がり、店から出ていった。

向かう先はもちろん警備隊の屯所だ。

私はその様子を椅子に座ったままのんびりと眺めた。

獣人の少女4

朝、警備隊の屯所に到着すると、何故かいきなり二人の女に詰め寄られた。

朝っぱらから女二人に詰め寄られている俺は、屯所にいる同僚達からの視線を全身に浴びてかなり居心地が悪い。

出来ることならば今すぐこの場から逃げたいが、テレサが俺をひどく冷めた目で見始めているのでそれは出来ない。

この修羅場を潜り抜けなければ俺は恩人に軽蔑される。

「と、とりあえず、一度詳しく話し合おう。なっ？」

「……………」

「……………」

仕方がないので、俺がガラにもなくそう提案すると、二人は一度お互い見つめあった後、『コクン』と俺のほうを向いて頷いた。

「じゃ、宿直室でちょっと話合うか」

俺はその様子に少し安心し、屯所の奥にある宿直室で話合うことを提案した。

「……………」

「……………」

すると二人は、何も言わずにさっさと屯所の奥に向かった。

俺は二人が目の前を通り過ぎるのを少し青ざめながら見ていると、他の同僚たちから「早く行ってこい！」と口パクとジェスチャーで急かされた。彼らもどうやら危険を感じているらしい。

「つたく、めんどくせえ」

何がどうなっているのかわからなかったが、とりあえず大人しく同僚たちの指示に従って二人の後を追った。

※※※

宿直室には仮眠用の簡易ベッドと作業用の小さな机と椅子が置いてある。

だが、俺たち三人は椅子にもベッドにも腰掛けず、立ったままで会話を始めた。

「あー、色々聞きたい事があるけど……、まず第一にお前誰だ？」

俺は部屋のいる小柄な少女にそう聞いた。実は屯所に来たときか

ら気になっていたのだ。

「え？ お、覚えてないの？ 私だよ？ ミーシャだよ？」

すると、ミーシャと名乗った少女が泣き出しそうな顔で俺を見つめ始めた。

「うっ……」

その視線の居心地の悪いこと悪いこと。

まるで自分が悪いことをしているようで酷く居たたまれない。どうやら俺とコイツは過去に面識があるようだ。俺は急いで記憶のそこからコイツとの関係を思い出す。

考えてみれば俺と女との関係性なんていくらもあったものではない。おそらく、昔俺が戦団にいたころ助けたか何かした奴だろう。

そうじゃなかったら、俺とこんなガキが知り合うはずがない。

「……えーっと」

改めて目の前の少女の姿を見てみた。

年は十代の後半で背丈は普通よりやや小柄。髪は白で瞳は少し赤みが入った茶色。後ろ髪を三つ編みにして髪の色と一緒に白い髪紐で一本に縛っている。

昔助けた奴らの中からコイツと該当する記憶を急いで探した。すると、該当する奴が一人見つかった。

あの時は痩せっぽちのガキだったが、よく見れば面影がないわけではない。

思い出すと、一気に緊張感が抜けた。

「なんだ、お前ミイか」

「覚えててくれたんだ!？」

俺がこのガキの昔の愛称を呼ぶとガキが騒ぎ出した。正直かなり煩かったが、泣かれるよりはマシだったので適当に流す。

「あんだけ手がかかるガキはなかなか忘れねえよ」

「嬉しい!　じゃ、あの約束も覚えてるよね!」

「は?　なんだそれ?」

俺はガキの言葉に違和感を持った。なんのことも全く分からない。

「俺、お前に何か約束したか?」

「したっ!　したよ!　お別れするときに!」

「んー?」

こめかみに指を当てて思い出そうとするが、全く思い出せない。

寝小便の後始末をした記憶ならあるが――

「お別れするときに『今度会う時はもっと一緒にいてやるよ』って言うてくれたでしょ！」

「あー、言われてみればそんなこと言ったか」

服にしがみついてグズるから仕方なくまた会う約束をしたんだって。まあ、今の今まで忘れてたけど。

俺が少し昔を懐かしんで感傷に浸っていると、ミィの奴が俺の目の前に近づいてきた。

そして、いきなり俺の手を握り、首をくてっとなげこう言ってきた。

「じゃ、約束守って私と結婚して」

突然の求婚に俺は――

「ざけんな」

普通にキレた。

獣人の少女4（後書き）

別に恋愛系を書いているつもりはないのに、この小説のページ下の小説紹介で恋愛系が増えていて最近驚いています。

獣人の少女5

「アホかお前は。俺なんかと結婚してどうすんだよ」

ガルーは突然のミーシャの告白を聞いて呆れたようにそう言った。はつきり言って、ガルーはこの少女とどうこうなる気はなかった。

元々、ガルーは色恋に対しての興味が常人よりもかなり薄い。

なので、突然求婚の告白されてもあまり嬉しくない。というか、本当に興味が無い。

「俺なんかじゃなくて故郷でもっと良い奴を探せ」

なので当然、ガルーはミーシャの告白を断る。

だが――

「……やだ。ガルーさんじゃなきゃ……やだ」

断られたミーシャは拗ねた子供のように顔を下に向けてガルーの言葉を拒否した。

そして、泣き出しそうな声でガルーに自分の気持ちをぶつけた。

「だって……私が好きなのはガルーさんだもん……他の人じゃないもん」

――他の誰でもない。自分のことが好きなんだと声を震わせて言

った少女。

「……あー」

これにはさすがのガルーは困り果てた。先ほども言ったとおり、ガルーはこういうことにはとことん疎い。だから、こんな時はどうすればいいのかわからないのだ。

そして、ガルーは徐々にミーシャの言葉に押され始める。

「…なんで私と結婚してくれないの？ 私のこと嫌い？」

「いや…あのな」

「私のどこが嫌い？ 言ってくれたら頑張って直すよ？ だから…
…！」

「いや、だからな……」

ガルーはいつもの強気はどこへやら、ミーシャの対応に少し弱気だ。

だが。

「……もしかして、『その人』のことが好きだから？」

突然ミーシャが言ったその言葉で状況が少し変わった。

「は？」

ガルーの口から間の抜けた声が出て呆然とした顔でミーシャを見る。その顔は何を言われたのかわからないという感じだ。

そして、そんなガルーの様子などお構いなしにミーシャは言葉を続ける。

「その人のことが好きだから、……私とは結婚してくれないの?」

そう言って、ミーシャは震える指先でテレサを差した。

「っ……!」

指差されたテレサは顔を真っ赤にして、それを隠すように慌てて顔を下に向けた。

しかし、やはりガルーがどんな反応をするのかが気になり、下を向いたままちらちらとガルーの様子を伺う。

震えた手で指をさすミーシャと、顔を赤くするテレサ。

そんな二人を見ながら、ガルーは頬をポリポリと掻く。

先ほどまでの弱気はどこへやら、今は普段どおりの悪人面に戻っている。

そして。

ミーシャの問いに、ガルーは当たり前の様にこう答えた。

「そうだよ」

『『!?!?』』』

ガルーの姿に照れはない。ただ、当たり前前のことを当たり前前に言っているだけだった。

さらに、ガルーは続けた。

「俺はコイツが好きだよ。だから、お前と結婚するのはもちろん、他の奴とどうこうなるつもりも全くない。……だから、悪いけど」

そう言ってガルーはミーシャの方を向き、頭一つ分背が低い彼女に目を合わせた。

そして。

「俺のことは諦めろ」

ガルーは再度求婚を断った。

その後。

部屋の中にはしばらくしゃくり上げる少女の声と、その少女の頭を優しく撫でる男。

そして、顔を真っ赤にさせながらも事の成り行きをすべて見守っ

ていた女がいた。

獣人の少女5（後書き）

最近調子が悪く、更新が遅れています。大変申し訳ないです。

獣人の少女6

「そういえばお前、どうして俺が王都にいるって知ってたんだ？」

「ガルーさんの里の人から聞いた」

「……マジか」

泣いていたミーシャが落ち着いたのを機に、ガルーは少し疑問に思っていたことを聞いてみた。

すると、ミーシャからガルーの里の人間から聞いたと言う。

これにガルーは絶句する。里を出るときは何も言わずに出て行っただけなのに、何故か居場所が知られていたからだ。

これはどういうことなのか？

ガルーは少しあせったようにミーシャに事の詳細を聞いた。

――すると。

「何で里の奴らが俺が王都にいるって知ってるんだ？」

「ガルーさんの里に、Rさんって人から手紙が来ていて、そこに……」

「そこに？」

「『ガル―は今、王都で女性のヒップを追いかけています』っていう内容の手紙があつて……」

「……あんの野郎」

ガル―は手紙の送り主に心当たりがあつた。ほぼ間違いなく奴だろうと確信する。

「最近おとなしいから何をしているのかと思ったら、こんなくだらねえ事してやがったのか！」

「ガル―さん？」

「う…、ああ、悪い。こっちの話だ。あーっと、それで里の奴らはその手紙を見て何か言つてたか？」

「んーっと、『奴にもやっと春が』とか『あいつが惚れた女を見てみたい』とか『どんな口説き文句をあの顔で言うのか考えるだけで腹が振れる』とか、そんなこと言つてた」

「それ言つたの、兵団の奴らだったか？」

「うん」

「……そうか」

忘れないようによく覚えておこうと、ガル―は心に刻んだ。

「それで、お前もその手紙を読んで王都に来たわけか」

「……うん」

「それで、これからどうする？ 故郷に帰るのか？」

「わかんない。先のことあんまり考えずに来ちゃったから……」

「そうか……。金とかは大丈夫か？ あとどれだけある？」

「ここまで来るまでに大分使っちゃったから、……残り少ない」

ミーシャはそう言って、腰に下げたポーチから財布を取り出しがま口を広げた。

財布の中を見たガルーは少し苦い顔をした。

「……少しまずいな。王都は他の都市と違って宿代が高い所が多いから、このままだと……」

「なにか仕事でも探さないかね。……私未成年で獣人だけど雇ってくれるかな？」

そう言って少し不安な顔をするミーシャ。誰も知り合いのいない場所でも仕事探しに恐怖を感じているのだろう。

そんな様子のミーシャを見てガルーはある提案をした。

——それは。

「だったら、俺の前の仕事やってみるか？」

「え？」

「ギルドって言うんだが、色んな仕事もあって人を差別しないから結構安心して仕事出来るぞ。格安の寮もあるから宿代

も大分浮くぞ」

「ほ、本当に？」

「ああ、どうする紹介してやろうか？」

「ぜ、是非おねがいします」

「じゃ、これか行くか？」

「うん！」

「よしっ！　じゃ、行くか！　あつ、テレサ、お前はどうする？」

「え、私！」

突然話しかけられたテレサは夢から覚めたようにハッと顔を上げた。

今までガルーとミーシャがずっと話していたので、いきなり声を

かけられて驚いたようだ。

しかし、それにしても顔が少し赤いのは何故だろう？

「わ、私はいいよ。仕事もあるし、ふ、二人で行って来て」

「そうか。じゃ悪いけどよ、手続きで色々と時間潰れるから俺は今日休むって言って置いてくれ」

「う、うん。わ、わかった」

「お前、なんか顔が赤いけど大丈夫か？」

「だ、大丈夫だから」

「それならいいけど。もし、なんかあったら前にやった笛吹けよ」

「う、うん」

「じゃ、悪いけどあとは頼んだ。行くぞミィ」

「はい。ガルーさん」

二人は揃って屯所を出てギルドに向かい、後に残されたテレサは顔を赤くしながらガルーが少し前に言った言葉のフレーズを脳内で繰り返し繰り返し繰り返していた。

『俺はコイツが好きだよ。だから、お前と結婚するのはもちろん、他の奴とどうこうなるつもりも全くない』

「~~~~~!」

テレサはガルーの台詞を思い出し、仮眠用のベッドに飛び込み手足をバタバタさせた。

※※※

「それにしてもガルーさん本当にこれでいいの？　言われたとおり保護者欄にルースって名前書いたけど」

「いいんだよ」

「でも、私この人のこと全然知らないよ？」

「ジゴロのろくでなし。これだけ覚えておけばいい。あと、何かそいつについて聞かれたら、『顔は知らないけど保護者です』って言うっておけ」

「いいのかなあ？」

「いいんだよ」

「うーん」

「あいつは今回ろくな事してないからな。少し懲らしめてやったほうがいい」

「でも、これだとルースさん誤解されない？ 子持ちだと思われるかも」

「それが狙いだ」

「うーん」

「あんま深く考えるな。それより、試しに何か仕事やってみるか？ 討伐系はいいのがあるぞ」

「ガルーさんが一緒ならどれでも一緒だから任せるよ」

「じゃ、これにするか。おーい受付。これ請けるから判子してくれ！」

そう言っただけでガルーはのん気に受付に向かって二人分の仕事を請けにいった。

※※※

後日、警備隊の屯所にて。

「ガ、ガルー！ この前言った私のことが好きって話だけど……！」

「ん？ ああ、アレがどうした？」

「あ、あれはどういう意味で言ったのか詳しく聞きたくて……！」

「あ？ いや意味も何も『恩人』のことが好きじゃなきゃ『恩返し』なんてするわけないだろ？」

「……………」

「ん？ おい。どうした？ なんだか顔色が……」

「なんでもないから」

「いや、なんでもないっていうツラじゃ……」

「ホント、なんでもないから」

「そ、そうか」

「それじゃ私仕事があるから、これで」

「あ、ああ」

何故かいきなり不機嫌になり目の前から去っていくテレサ。

そして、その姿に少し怯えるガル！。

そんな二人の様子に、聞き耳を立てる警備隊の隊員達。

色々と問題はあるが、とりあえず今は平和だった。

獣人の少女6（後書き）

次から新しい話を書くつもりです。
えぐい話とかバトルとか書きたい気分です。

武闘大会1

「ガルー。あなたこれに出てみませんか？」

「あ？」

夜、同居人であるルースが何かの紙を渡してきた。紙は何かのチラシのようだ。

紙を渡されたガルーは怪訝な顔でそれを読んだ後、「なんだこれ？」と紙から顔を上げてルースに説明を求めた。

「何って、今度王都で開かれる武闘大会のチラシですよ」

するとルースは恍けた口調で渡した紙に書かれていた内容を要約した。

「あー、つまり、アレか？ 俺にこれに出場しろってか？」

「そうです」

「……………」

ルースの説明を聞いたガルーは嫌そうな顔で渡されたチラシをルースに返した。

「めんどい」

ガルーはそう言って、自分のベッド方に行き、さっさと眠ろうとする。

「え？ ガルー、あなた興味がないんですか？」

「棒切れ振り回してやる気なくしたら負けとか、どうせそんなルーでやるんだろ？ 正直、そんなガキの遊びみたいなもんにはやる気がでない」

欠伸交じりにガルーはそう言いながら、硬いベッドの上に横になろうとする。どうやら本当に武闘大会に興味はないようだ。

「そういうわけだから、その大会に興味があるんなら自分で……」
「でも、大会の優勝者には結構な額の賞金がでるらしく……」

『ガバァッ!!』

今にも眠りにつこうとしていたガルーがベッドのシーツをふっ飛ばして、ルースの方にドスドスと足音をさせて向かっていった。

そして、ガルーはルースの胸倉を掴んで先ほどの台詞について問いただした。

「いくらだ!」

「はい?」

「賞金額はいくらだ!」

「ああ、優勝者には200万ほどのお金が渡されるとチラシには書いてあります」

「よし!」

「ガルー?」

ガルーは拳を握ってガッツポーズをした後、ルースに突っ返したチラシを再び奪うようにして手に戻した後、もう一度念入りにチラシの内容を読んだ。

『武闘大会』

「場所」

軍の大型鍛錬所。

「出場条件」

当日までに申し込み窓口で手続きをした15歳以上の成人。

「ルール」

魔術は使用禁止。武器は持ち込み可能。

相手に負けを認めさせるか、試合続行不可能なほどのダメージを負わせれば勝ちとする。

しかし、相手を殺害した場合はその場で即刻退場。

チラシには他に予選のルールやら本選の勝ち抜きがどうのこうの書いてあったが、ガル―はめんどくさいので読み飛ばして大会の日時が書かれている場所を探した。すると、紙には大会の日は今から一ヵ月後と書かれていた。

これなら事前に報告しておけばなんとか休みがとれるだろう。

そうすれば……。

「大会に出場してテレサさんの家の借金を返せますね」

「…っ!？」

チラシに夢中になっていたガルーのことをにんまりと笑顔で見ているルースの姿があった。

「いやー、チラシを持ってきてよかった。気に入ってもらえたよう
でなによりです」

「……お前、最初から」

「はい？」

「……あー、なんでもない。お前にはまだ返してもらってない借り
もあったの思い出した。それに、お前に礼とかすんの気持ち悪い」

何かを言おうとしたガルーだったが、寸でのところで思いとどま
り、憎まれ口を叩いてチラシを持ったまま再び自分のベッドの方に
向かっていった。

そんなガルーを見てルースは――、先ほどまでの笑顔とは違った、
また別の笑顔でもって、

「ははっ！　そうです。それでこそガルーです！」

と、にこやかに笑うのであった。

武闘大会2

獣人は高い体力や運動能力が優れるばかりか、『獣化』という能力を持っている。

この『獣化』という能力は、その種族の特性を活性化させる事や人間から獣の姿に変身することが出来る。

ガルーは人狼。つまり、狼の獣人であり、『獣化』すれば抜群の嗅覚と桁違いの運動能力を得る。また、この運動能力の

上昇に伴い筋力が増加し、ガルーの体は天然の鎧へと変わる。

素手の拳や蹴りでは痣一つできないし、木の棒で叩こうが、むしろ木の棒の方が先に壊れる。もちろんガルーは無傷だ。

だが、だからと言って剣で切られれば肌は切れるし、多少だが肉も裂けるだろう。

前の辻斬りのときにやった『完全獣化』をすれば、それも防げるのだろうか、――それは少しまずい。

何故なら、武闘大会で狼の怪物が出てきたら大騒ぎになってしまうからだ。

だが、防具もつけずに大会に出てしまっただけは大きな怪我をしてしまう可能性がある。

なので、ガルーは他の出場者が振り回す剣から身を防ぐ防具を探

す必要があった。

しかし、大会が開催されるまで後一週間をきったても、ガルーは自分が気に入った防具を見つけることはできなかった。

元々、ガルーの戦い方は素手によるゴリ押し戦法が主であり、防御などは殆ど考えずに生きてきたのだ。

人狼の並外れた回復能力により傷がすぐに完治するせいだろう。

ガルーは身を守る防具についてかなり無頓着だった。

しかし、今回は獣化することも出来ないし、高速で回復する姿も人目に晒したくは無い。

いくらこの国が亜人や獣人と仲が良いと言っても、そんな姿を見せればこの街に居づらくなる。

そうなってしまつては恩人であるテレサに恩を返すことも出来なくなってしまう。

それは大変困るので、ガルーは早急に防具を探す必要があった。

そして、何店かの防具店を見て周り、都合のよさそうな武具を購入した。

武具は「ナックルガード」と呼ばれる拳闘士が剣を持つ人間の斬撃から身を守るための防具で、手の甲から肘までをすっぽりと硬い金属で守り、また使用者の打撃を上げる、ガルーにはお似合いの武具だった。

実際、ガル―はこの武器で、一度害獣駆除として街の外で何匹かモンスターを狩ってみて、中々の『威力』だったのでかなり気に入った。

さらにガル―は警備隊の仕事でもそのナツクルガードをつけたまま働き、体にナツクルガードの重さを馴染ませて大会までの数週間を過ごした。

武闘大会2（後書き）

スランプ中。

しばらく、こっちでリハビリをしようかと思っています。

武闘大会3 予選

武闘大会に出場するためには、「予選」と呼ばれる試験に通過しなければならない。

また、この「予選」に通らなければ武闘大会本選には出場するとは出来ない。

多少面倒な事かと思うかも知れないが、年々増加傾向にある怪我や事故をなくす為には必要な措置であった。

そして、予選のルールは至って簡単。

この国で「騎士」と呼ばれる役職の人間達と模擬戦をし、そこで実力を認められれば、本選への出場資格を獲得できる。

特に勝つ必要は無く、大会に出場しても無事で終われる程度の腕があると、騎士に認めさせれば良い。

騎士はこの国でも上位の戦士でなければ就くことが出来ない役職であり、その戦闘技術は当然高い。なので、「おのぼり」でやって来た田舎の若造や金目当てで実力不足の輩はここで落とされる。

だが、過去にたまたま調子が良くて騎士に痛撃な一撃を入れることが出来た年端もいかぬ少年いたり、見え麗しい貴族の令嬢が優勝候補にまで上り詰めたこともあった。

ごく稀にだが、こういった例外が現れることがある。大会主催者が予想しない、ダークホースが。

そして、今回の武闘大会の予選でもそのダークホースが現れた。

しかも、とびっきりのダークホースが――。

――「そいつ」は、予選で担当の騎士を一撃でぶっ飛ばした。

文字通り、ぶっ飛ばしたのだ。

「そいつ」は試験開始と同時に走り、剣を構える騎士に構わず、全力で騎士をぶん殴った。

騎士はしっかりと拳を剣で受け止めていたし、全身に鎧も着込んでいた。

にも、かかわらず、騎士は殴られた衝撃に足を踏ん張ることが出来ず、勢いのまま宙を舞った。

騎士がわかったのは、自分が物凄い力で殴られたことだけだった。

騎士は地面に落ちた後、何とか立ち上がったが、騎士の剣は刃が潰れ使い物にならず、これ以上の模擬戦は不可能となった。

そして、「そいつ」は周りで見ていた他の騎士や他の予選参加者が啞然とする中、模擬戦をした騎士から本選資格をあっさりと獲得

した。

試験開始から一分も経たない時間での出来事だった。

そして、この話を聞いた大会関係者は内外を問わず「そいつ」の名前を調べ、そして覚えた。

「そいつ」の名は——ガル——。

最近警備隊に所属し始めたばかりの、まるでチンピラのように目つきの悪い青年だった。

武闘大会4 貴族の娘

武闘大会の会場である大型鍛錬場は元々は何百年も前の王が造らせた闘技場だ。

大きさは高さ約50メートル。長径約200、短径150メートルの楕円型の建物。

天井は無く、建物の中は闘士達が闘うための広い細かい砂地の地面とそれを観戦するための観客席があり、昔はここで闘士達が命をかけた賭け試合をしていたのだが、今は軍の鍛錬場として使われているのみ。

ごく稀にだが、今回のような武闘大会などのイベントがある時は一般の平民にも開放され、観客席に収まりきれない人がこの元闘技場に押し寄せる。観客は入場料として食費二回分ほどの金を払わされるが、それ以外は金銭を払うことはなく、

特に騒ぎを起こさなければ大会を最後まで見ることが出来る。

このイベントは元々国王がちょつと金稼ぎと優秀な人材を確保しようと考えたものだ。

そのため、闘技場の外には食べ物関係の露店が並び、闘技場の中では貴族などがめばしい人材はいないかと大会出場者のの様子をじつくりと見定める。

——だがそんな中、観客席の中でも特に上等な席に座るいかにも

貴族な姿の女性は、眉を顰めていた。

真っ白な生地に金色の刺繍を凝らしたドレス。身に着けた指輪やネックレスなどの貴金属の質。

そして、なにより平民ではありえない肌の白さとキメの細かさ。毎日櫛を入れなければ生まれない美しい金髪。

小ぶりの顔に対して大きな瞳。それと、すっと通った鼻筋に綺麗なアゴのライン。

血筋と、その力を使った日頃の手入れをして手に入れた美しさ。

その美しさを持った彼女は間違いなく貴族の、それも名家の令嬢だった。

だが、彼女は今はその美しい顔を顰めながら闘技場の様子を眺めていた。

すでに大会は開会の挨拶は終わり、これから大会出場者達の熱い戦いが始まるのだが、彼女は不機嫌そうだった。

それと言うのも、彼女が今この場にいるのは彼女の本意ではないからだ。

簡単に説明すれば、年頃になった彼女に専用の護衛を雇おうとする父親と喧嘩をして、彼女は今この場にいるのだ。

父親が雇おうとするのは屈強な大男ばかりで、彼女は見るだけで怖かった。だが、気恥ずかしさからその事を父親を前にして言うこ

とが出来ず、何かと文句をつけて断っていたのだ。

しかし、だからと言って護衛を雇わないわけにはいかず彼女と彼女の父親は何度もその事で衝突した。

そして何度目かの喧嘩の時、つい彼女は「自分の護衛くらい自分で探せます！」と大口を叩いてしまったのだ。

その結果、こうして強者が集まる武闘大会で彼女は自分の護衛になつてくれそうな、「見た目が怖くない、でも強そうな人」を探しているのだった。

だが、中々そんな人間を見つけることが出来ず、先ほどから闘技場に現れる出場者は恐ろしい見た目の者ばかりだった。

「はぁ……」

その様子にため息をつく彼女。それを見て、後ろから侍女の姿をした女性が声をかけた。

「アマリーお嬢様。よき方を見つけられましたか？」

「全然よ、リース。全員見た目が怖くて、目の前に立たれただけで足が震えそうだわ」

「まだ大会は始まったばかりです。お嬢様。きっとこれからお嬢さまのお目にかなう人物が現れるはずですよ」

「だと、いいのだけど……」

そう言って、アマリーと呼ばれた貴族の令嬢は慰めの言葉をかけてくれた友人兼世話係でもあるリースという名の侍女に返事をした。

リースの母はアマリーの乳母であり、その関係からはアマリーの専属の侍女として働くことになり、幼い頃から彼女たちは姉妹の様に育った。

リースはアマリーよりも歳が三つほど上であり、常に冷静な判断をする彼女は、少し頑固で強情な所があるアマリーの良き「姉役」として、屋敷の人間たちからも高い信頼を得ていた。

もちろん、アマリーもリースのことを信頼しており、何か相談事があればリースに必ず相談していた。

それがいつものパターンであり、今回もそうであった。

今日、この場に彼女たちがいるのは、アマリーがリースに相談した結果であった。

貴族の娘が個人で長期的な護衛を雇うのは難しい。

探す場所がかなり限られる上に本人の実力を図ることが難しいからだ。

ギルドなどで護衛を雇うことも出来る。しかし、ギルドの人間は短期での護衛をするが、長期でどこかに使えるようなことはしない。それは、彼らは何かに仕えるような事をすることを嫌うからだ。

他には、騎士やその従者などをスカウトするなどの方法もあるが、何かコネがなければ彼らに会うことすら難しい上、話すら聞いては

もらえないだろう。

その為、彼女たち今回の武闘大会を見に来たのだった。

武闘大会には仕官口を探しているどこかの騎士やその従者など、実力のある人間が多く集まる。

そんな彼らと上手く交渉が出来れば、アマリーの今回の問題は解決する可能性がある。

なので、アマリーとリースの二人は貴族専用の闘技場のよく見渡せる観客席に座って大会出場者の闘う姿を見ているわけなのだが……。

「実力が拮抗している所為かしら……？ どなたも同じように見えてしまうわ……」

試合が始まり、二人の出場者が剣や槍を持って闘っているのだが、アマリーの目にはどちらが強いのかはつきりとわからない。

勝負が終わってみても、どちらも強かったとしか思えず、どちらかを護衛にしたいとは強く思えなかった。それになにより、どちらの戦士も筋肉隆々でアマリーは怖かった。

——その後も何試合か試合が始まったが、どの出場者もアマリーは護衛にしたいとは思えなかった。

「どうでしょう……リース。このまま誰も護衛にしたいと思える人が出てこなかったら……私」

「お嬢様、大丈夫です。まだ大会は始まったばかりですから、……それにここで見つからなくても私がまた何か方法を探して参りますから」

「リース……、ありがとう。……あなたが侍女で本当によかったわ」

「勿体無きお言葉ありがとうございます、お嬢様。さあ、では次の試合を見ましょう」

心底安心したように言うアマリーに腰を折り礼を述べるリース。

「ええ、そうね」

そのいつもやり取りにアマリーは平常心をとり戻り、試合を観戦するために闘技場に目を戻した。

「次はどうやら、今大会注目の強戦士同士の試合らしいですよ」

リースが大会開始前に大会係員からもらった大会案内に書かれた出場者の紹介を読む。そこには大会ルールから出場者の人数と対戦表、簡単な紹介文が書かれている。それをリースは読んでアマリーに説明しているのだ。

「まあ、一体どんな方たちが闘うのかしら？」

「片方はもうすぐ小隊長に任命され事が決定されている騎士さまです。お嬢様」

「まあ、ではその方は護衛には誘えないわね。残念だわ」

「ええ。ですが、もう一人の方は警備隊に最近勤め始めたばかりの新人だそうです。上手く交渉できればスカウト出来ます」

「そうなの？　なら、どんな方なのかしつかりと見なきゃいけないわね」

「はい、お嬢様」

二人はそう言って闘技場にこれから現れる二人の戦士を待った。

そして待つことしばらく――、二人の戦士が闘技場に現れた。

一人はいかにも騎士らしい、銀色の鎧と大きな大剣を構えた金髪の二十代前後の若い青年。

青年は鎧の上からでも見てわかる屈強な体つきをしており、顔つきも歳のわりにずいぶんと引き締まっており、いかにも「やりそう」な青年だった。

それ対して、もう一人の戦士の姿は、……なんというかアレだった。

髪も服も黒くて印象が悪いことも原因だが、目つきが鋭く、籠手らしき物を嵌めた拳を「ガチン、ガチン」と鳴らす姿がいかにもアレっぽい。

……戦士というよりも街の路地裏などにいるガラの悪いチンピラ。
それが、登場した黒い戦士の印象だった。

「な、なんだか、ずいぶんと変わった方のようなね」

「変わった方、というよりもただチンピラでしょう。アレは」

「で、でも、中身はもしかしたら違うかもしれないわよ？」

その時――。

『なあ？ まだ試合始まらねえの？ 早く始めてくれよ』

アマリーとリースが登場した黒い方の戦士について話していると、
その黒い戦士が退屈したように大声で誰かに話しかけている。

『さっさと始めてくれねえ？ 退屈で仕方がねえんだけど？』

どうやら試合を開始する審判にでも話しかけているらしい。それ
にしてもずいぶんと言葉が荒い。

「「……………」」

それを見て、アマリーもリースも確信する。

「……チンピラです。お嬢様」

「……そうね」

これがガルーとアマリー達との出会いであり、ガルーにとっては面倒ごとの始まりであった。

武闘大会4 貴族の娘（後書き）

情景などをもう少し書いたほうがわかりやすいと指摘され、今回少し頑張ってみました。

まだまだ未熟かもしれませんが、これからも頑張ってわかりやすい文章を書いていきたいと思います。

何か感想や意見がありましたら、どうぞお気軽に感想に書き込んでください。

武闘大会5 騎士との戦い

「あなた、武器はどうしたんですか？」

「あ？」

ガルーが試合が開始されないことに焦れていると、対戦相手である騎士の青年から声をかけられた。

「見たところ、あなたは武器を構えるどころか持ってすらいらないようです？」

騎士の青年はガルーが武器を持たずにこの場に立っていることに疑問を持っているようだった。

「いや、持っているぞ」

「は？」

だが騎士の疑問に対してガルーは、拳を構えることで答えた。

「凶悪なのを、二つ」

かかげた物は、二つの拳。

ガルーのこの行動こそが騎士に対する答えであり、己の武器の所在証明であった。

「なっ！ あなたはまさか……！」

その姿には騎士が咄然とし、観客にも動揺が走った。

武器の使用を認められたこの大会で、ガルーという男は素手で挑むと言っているのだ。

一応、腕にはナックルグローブと呼ばれる武器を装備しているが、それが剣や槍と戦うのにどれほどの力を持っているだろうか？

剣や槍などの鋭い剣先と長い間合いにかかってしまえば、素手など殆ど無力に近い。熟練した使い手が相手ならば、尚のこと分が悪い。

だが、拳を構えるガルーからはそんな不利な状況に対する怯えや恐れを感じない。いや、むしろ騎士や観客が驚いている姿を楽しんでいる様子すらある。

「どうした？ 俺は武器を抜いたぞ。アンタも、ソレを早く抜けよ」
騎士が背負っている大剣の鞘を、構えたまま拳から一本指を出して指す。

「あ、あなたは本気で素手で戦う気なのですか！」

「おう」

「っ……！ 刃物を振り回すチンピラや酔っ払いを相手取るのとは訳が違うですよ！ もしかすれば命の危険が……！」

騎士は武器を持つ自分と戦うことに危険性について必死になって

説明を始めた。その様子から相手になにか武器を持たせて対等の勝負をしたいという必死さが伝わってくる。騎士という仕事柄のせい、それともこの騎士の性格なのか、ずいぶんと人がいい。

だが、そんな親切心を意にも介さない男がいた。

「うるっせえんだよ！　ごちゃごちゃ言っている暇があるならかかって来いっ！」

もちろん、その男とはガルーのことだ。

ガルーは目の前でごちゃごちゃと説明を始めた騎士にあっさりとキレた。

戦闘前の高いテンションも理由だろうが、なによりこういった説教や説得などのやりとりがガルーは大嫌いだったのだ。

おそらく、昔さんざん故郷で聞かされたせいだろう。

「戦う相手に説教なんかしてんじゃねえよ。ぐだぐだ言ってねえでさっさとかかって来い！　それとも、てめえの背中にあるそれはただの飾りかっ！？　ああ！？」

そのせいか、いつもよりも若干口調が荒く、観客席にいた女性達から悲鳴が上がった。

しかし、なかなか始まらない試合に苛立ちを募らせていた男たちからは野太い声で同意の声が上がり、観客席からは試合が始まっていないにもかかわらず歓声が鳴り響く。

だが、その歓声の中にいる二人の戦士は睨み合ったまま動こうとしない。

「「……………」」

ガル―は拳を構えたまま相手が剣を抜くのを待ち、騎士は先ほどガル―に言われた言葉に、『騎士』として対応するか『男』として応じるか迷っているようだった。

騎士はだいぶ迷ったが、ついには――

「……ここまで言われては、剣を抜かない訳にはいきませんね」

騎士は、剣を抜いた。

騎士は戦いを願っている相手に対して自分の考えを押し付けているのは、愚かだと思ったからだだ。

だがこの考えは、騎士として相手に戦士に敬意を払った末の考えなのか、それともガル―の台詞に怒りを感じた若い男の言い訳なのかは騎士は自分でもわからなかった。

――だが、今はそんなことよりも。

「全力で相手をさせていただきます」

騎士は相手の戦士と全力で戦い、勝利を勝ち取ることだけを考え

ていた。

そしてガル―も――。

「いいぜ。来いよ」

ただ相手を叩きのめし、勝つことだけを考えていた。

※※※※※

「「……………」」

銀色の輝く大剣を構える騎士と、鈍く光る拳を構えるガル―。

この大会では試合の開始には銅鑼が鳴らされるのだが、今の二人にはそんなものは必要なかった。

相手の構えや足運び、そこから得た情報。

試合を始める前までは互いにはつきりとわからなかった事だが、戦う気になり、間合いを詰めていくにつれて徐々に相手の力量がわかると、銅鑼など気にしてはいられなくなった。

ガル―と騎士は互いにそれほどの脅威を相手に感じていたのだ。

そしてその脅威を、恐怖と感じる前に二人は動き出した。

まず最初に動いたのは騎士。

「せいっ！」

一気に間合いを詰めながらの踏み込み斬り。

相手の右肩から左腰へかけて斬りかかろうとするが不発。ガル―はそれをやすやすとバックステップで避ける。

そして、そのまま今度はガル―がその強靱な足腰のバネを駆使し、バックステップから一步足を踏み込み、後ろ回し蹴りを繰り出す。

「らあっ！」

ガル―の足が鎌のように騎士に襲い掛かるが、それを騎士は剣を地面に突き立て、盾のようにして構えることで防ぐ。

「ぐうっ！」

だが、ガル―の桁外れの脚力から繰り出された蹴りは剣ごしに衝撃を与え、相手に隙を作る。

その隙を逃さず、ガル―は連激を繰り出す。

間合いを完全に詰めた後、掌底を相手の脇腹に一発入れ、その衝

撃で顎を下がらせ、下がった顎に右肘をカチあげるように振り上げる。

「ぐはっ！」

技は決まり、騎士は仰け反り倒れそうになるが、なんとか足を踏ん張り踏みとどまる。

「はあ、はあ、はあ……！」

だが、顎を強打されたからか脳が揺れ、ふらつく騎士。

「おらあっ！」

それに止めをさそうとするガルーだが……。

「っ……！」

騎士の目に光が戻る。

「しっ！」

間合いを詰められ容易に剣を振れない状況だったが、しかし剣の柄でガルーの頭部を狙う。

「ちいっ！」

ふらつく相手からの反撃にガルーは意表をつかれ、それを掠らせてしまう。

大したダメージではなかったが、止めをさす手が止まり、その隙に騎士が距離をとってしまった。

間合いが開き、今度は騎士に有利になる。

「はあ、はあ、はあ」

騎士は間合いを保ったまま呼吸を整え始めた。

「せい、やあっ！」

そして、数秒で呼吸を落ち着けた後、もう一度攻勢に出た。

今度は踏み込んで斬り込むことはせずに隙の少ない振りで相手にダメージを与えようとする。

だが、さきほどのダメージが抜けきらないのか、剣速は遅く威力もない。

『ガキーン!!』

「っ!?!」

その所為で、ガルーのナックルガードを嵌めた拳に容易に受け止められてしまった。

「なんとっ!」

驚愕する騎士だが、ガルーは止まらない。

「ふっ！」

拳の甲を十字に交差するようにして剣を受け止めたガルーは、そのまま左手で剣を受け流す。

そして残った右手の裏拳を、騎士の顔面にぶつける。

「ぐはあっ!？」

ナックルガードを嵌めた拳で放った裏拳は騎士の眉間に直撃し、騎士は吹っ飛んだ。

「ぐっ! がっ……! うあっ…ああ……」

騎士は地面に転がり苦悶の声を上げていたが、しばらくすると気を失って倒れた。

騎士が気を失ったことにより、ガルーの勝利は確定し、武闘大会で一勝をあげることになった。

そして、この試合を見た観客は試合の内容とガルーの強さに驚愕し、特に貴族達はガルーの詳細な情報を手に入れる為に従者を大会係員の所へ走らせた。

そしてそんな中で最も驚愕し、目を見開いたままガルーを見つめる女性がいた。

貴族の令嬢アマリーと、その従者リースだ。

「あ、あの方は何者なのですか？ 武器も持たず、素手で騎士の方を倒しましたよ!？」

「一応、武具として箆手のような物をつけていたようですが……」

「だからと言って、あ、あのように勝てるものなのですか？」

「まず無理ですね。普通は刃物相手に素手で挑めば緊張で体が強張り、動けなくなります」

「で、でもあの方は……」

「よほどの修練を積み、そして相当な胆力がある方なのでしょう。でなければ、剣を持った相手に拳で戦うなんてまともな神経で出来るはずがありません」

「……あの騎士の方が特別弱かったなんて事はない？」

「今大会の優勝候補に名があがっていたほどの方です。それはないでしょう」

「そう……」

リースの答えになにやら少し考え始めた様子のアマリー。

「お嬢さま?..」

その様子に従者であるリースがアマリーに声をかけた。何か思いつめたような彼女に少し嫌な予感を覚えた。

そして、その予感は数秒後に的中することになる。

「……ねえ、リース。お願いがあるの」

「……はい。何でございましょうか、お嬢様」

アマリーの願いに耳を傾けるリース。なんとなくだが、彼女はその願いに予想がついている。

だが、言葉を先回りすることなくリースは黙ったままアマリーの願いを聞いた。

その内容とは……もちろん。

ガルーという男の情報を出来る限り集める事だった。

武闘大会5 騎士との戦い（後書き）

誤字脱字の報告、または感想など待っています。

武闘大会5 決勝戦

大会は順調に進み、すでに残すは決勝戦のみとなった。

そして、その決勝戦を戦うのは今大会初出場のガルート、前大会優勝者の騎士団副団長ノワール。

ノワールは騎士団には珍しい女性騎士であったが、国一番のレイピアの使い手。

ガルートは素手で剣や槍を持つ猛者たちを力づくでなぎ倒すのに対し、ノワールは細身のレイピアで敵の隙を突き、華麗に勝ち上がった。

その戦いには華があり、観客は大いに盛り上がった。

そして、その盛り上がりは決勝戦が始まると最高潮に達した

※※※※※※※※

『カッ！ カッ！』

『ガッ！ ガッ！』

突き出される剣撃を拳で払い――

『ガンッ！ ガンッ！』

『キンッ！ キンッ！』

繰り出される拳撃を剣で払い落とす――

両者の拳と剣から繰り出される連撃の数々に、観客が歓声を上げる。

耳がおかしくなるほどの音の中で、二人の戦士がさらに攻撃の手を増やす。

目にも止まらぬ突きの連撃。

それに対抗しての拳の連打。

そして、それを回避する両者の驚異的な見切り。

試合開始から有効打はなく、勝負の行く末はまだ誰にもわからない

い。

それゆえに観客は熱狂する。

どちらが勝つかわからない勝負の結果、その過程の姿に。

観客は熱狂する。

素晴らしい戦いに、それを見せてくれる強き戦士達に。

拳を握り、足を踏み鳴らし、声を枯らし、最後の試合に相應しい戦いを褒め称える。

——だが、どんな戦いにも終わりは来る。

ガルーのナックルガードは度重なる攻撃にひしゃげ、ノワールの剣は刀身がなまくらと化している。

『武器』を使って戦えるのは、両者ともあと一撃だけだろう。

つまり、両者の戦いはもうすぐ終わる。

『……………。』

観客にもその緊張が伝わり、闘技場は静まり返る。

「……………」

「……………」

一定の距離を保ったまま、ガル―とノワールは対峙する。

ガル―は両の拳を胸の高さで固定し、ノワールは鋭い剣先を相手の喉元に向かって狙い定める。

そして、両者の緊張感が最高潮に達した時。

両者が動いた。

先に動いたのはノワールの方。

鋭い剣先をガル―の喉元に向かって一直線に突き出す。

ノワールが得意とする必殺の一撃だが、すでに戦いが始まってからは何度も破られてきた。

だが、武器がなまくらとなり、ノワール自身も疲労困憊の今では、これが繰り出せる最後の一撃だった。

――だが、その最後の一撃は相手に通用しなかった。

突き出したレイピアは目標に当たらず、空を斬る。

「しまっ……！」

空ぶったと分かり、すぐに突きの姿勢から体を戻そうとするが、疲労困憊のノワールの体はそこで防御に回すだけの力が残っていなかった。

「おらあっ！」

気がつけばノワールの目前には、先ほどの一撃を紙一重でかわしたガルーの姿が映る。

ガルーはすでに反撃の態勢に入っており、このままではまともな防御も出来ずに直撃を食らう。

「くうっ……！」

ノワールが反射的に身を庇おうとするがこのままでは間に合わない。

だが、その時。

「…ちっ！」

ガルーの攻撃の軌道が変わった。

ノワールの腹辺りに向かうはずだった攻撃は、何故か武器を持つ

手の方へ。

そして、そのままアッパーカット気味の拳がレイピアの柄に当たる。

『ガンッ!!』

「っ……!!」

その衝撃は疲労したノワールに耐えられる物ではなく、ノワールはレイピアを落としてしまう。

「ふっ!!」

「うっ……!!」

そして、その瞬間を逃さずにガルーの拳がノワールの鼻先で止まる。

しばらくノワールは目の前の拳を見つめていたが、最後は悔しそうにこう呟いた。

「……私の負けです」

この瞬間、勝負が決まり。

ノワールは自分の敗北を認め、ガルーの優勝が決まった。

観客はその時、自分の声が枯れるまで声を出し続けた。

※※※※※

その後、優勝賞金や賞状の受け渡しなどを大げさなやり方で渡され、『さあ、帰るか』と思っていたガルーだが、思わぬ事がまだ残っていた。

それは、『大会優勝者祝勝会』だった。

武闘大会5 決勝戦（後書き）

やっと書きたかった所が書けます。
ずっと書きたかったんです。
ガルーの正装姿。

祝勝会1

優勝者祝勝会と言っても、主役が一人だけだというわけではない。

大会上位に勝ち上がった選手達の殆どが祝勝会に呼ばれる。

これは優勝者を祝うだけの催しではなく、大会で良い成績を残した者達を軍に入らせたり、護衛として勧誘するためだからだ。

その為、この催しの会場である王城の大広間では、毎年いたるところで勧誘する貴族の姿が見られた。

だが、今年は少し様子が違った。

「もうすぐ陛下もいらっしゃるといいうのに、今大会の優勝者は一体どこに？」「正装を手伝った侍従達は何と？」「それが、もうこちらに向かったと言っております」「では、すでにこの会場にいると？」「いや、あれだけ目立つ男を見落とすはずがないでしょう」「では、一体どこに？」

毎年、一番人が多く集まるのはその年の大会で優勝した人間の所なのだが、今年はその優勝者が祝勝会が始まって中々現れず、貴族達が一箇所に集まって話し込む姿がそこらじゅうで見られた。

「……………」

「……………」

そして、そんな様子を壁際に配置された長椅子に座りながら貴族令嬢であるアマリーとその侍従リースは眺めていた。

彼女たちは今大会の優勝者であるガルーを護衛として雇うためにこうして祝勝会にやってきたのだが、肝心のガルーがおらず肩透かしをくらっていた。

「…本当にどうしたのかしら？」

「これは私の勘ですが。ここに来るのに迷っているのではないでしょうか？」

「え？」

「王城の中は初見では迷路のようなものですから、案内もないまま歩けば迷ってしまう可能性があります」

「ああ、なるほどね」

「ですから心配などせずとも、その内いらっしゃるでしょう」

「……そうね。祝勝会も始まったばかりだし、ゆっくり待ちましょう」

そのまま二人はこの後どうやってガルーを勧誘する作戦を色々話し合っていたが、ガルーがこの会場にやってくる気配はなく、アマリーとリースの話のネタもなくなりだした。

「あつ、そういえば」

だが、そんな時だった。

アマリーが『その事』に気がついたのは。

「お嬢さま？ どうしました？」

「ねえ、リース」

「はい、お嬢様」

リースは自分の主人の様子を見て、どうしたのかを訊ねた。

すると。

「ガルー選手の正装って想像出来る？」

「……………」

アマリーにそう言われて思わず想像してみた。

だが、ガルーのあの鋭すぎる目つきとアウトローのような物腰。

そんな人間が首に蝶ネクタイをつけた燕尾服姿は、はっきり言って想像が出来ない。

しかし、ガルーは会場に正装して来るはずだ。

「……い、いえ、全く想像が出来ません」

そう口にしながら、リースの中で好奇心がムクムクと起き上がってきた。

「ふふっ」

そして、どうやらそれはアマリーも一緒だったようで、彼女は内緒話をするようにリースに向かって小声で「すごい楽しみね？」と囁いた。

——そんな会話をしていた彼女たちだったが、二人の隣の長椅子で燕尾服姿の『鋭い目つきの男』が椅子に座って天井を眺めていることに気がついていなかった。

「彼」はずっと前からそこにおり、会場にいた令嬢などの視線を少なからず集めていたのだが、彫像のように宙をボーっと見ながら殆ど動かない姿に誰も声をかけようとしなかった。

その所為で「彼」が誰なのかを知った人間などおらず、アマリーとリースは気がつかずに話をしていたのだった。

——その『鋭い目つきの男』とは、今大会の優勝者であり、アマリー達や会場中の貴族が待ちに待っている男。

つまり、ガル―本人だった。

「……………」

だが、彼は隣で自分のうわさ話をされているにもかかわらず、ずっと宙を眺めているだけだった。

祝勝会1（後書き）

正装姿を書こうと資料を探しけれど、手元に黒執事しかなかった。

祝勝会2

ボサボサだった髪は櫛を通され、艶のある黒髪に。

鍛え上げられた肉体を包む込んだのは、黒のジャケットとスラックス。

そして、白いシャツと首元には白の蝶ネクタイ。

手には白の革手袋と足には黒の革靴。

男性の最上礼服の一つである「燕尾服」

それを身に纏ったガルーは、はっきり言えば目立っていた。

ガルーのような鍛えた体格をした礼服姿の男性というのはそれだけでも意外に目立つのだが、酒を取りに行くなどして動くときと自然と周りの視線を集めた。

しかし、本人はその事を全く気にしておらず、ただ喉の渇きをいやす為に給仕から酒の入ったグラスを受け取った。

そして、グラスを傾け、中の液体を口に含み喉を鳴らす。

『ゴクンッ……』

周りにいた人間はその動作をただぼんやりと見ていたのだが、ガルーが喉を鳴らした音を聞いた瞬間。

——背筋が凍った。

まるで、森の中で肉食獣に出会ったような感覚。

そして、それは今まで関係の無い雑談をしていた人達も同じだったらしく、会場にいた人間の多くが「感覚」のした方を見た。

すると、そこにいるのは酒を一息で飲み干したガルーがいた。

「「あっ!!」」

そこで、何人かの人間がやっと気がついた。

服装がどれだけ変わろうが顔つきまでは変えられるわけではない。

すこし注意深く見てみれば、ガルー本人だとわかる。

だが、今までガルーの勧誘をしようと彼の登場を待っていた貴族達は誰も彼に近づこうとしなかった。

いや、出来なかった。

一步でもガルーの傍に行こうとすれば、ガルーは近づいてきた人間に目を向けるだろう。

ガル―本人は敵意も何もなくただ見るだけだろうが、貴族はそれだけで身動きがとれなくなる確信があった。

野生の獣の食事の邪魔をどうなるのか？

子供でも少し頭をひねればわかる事を、実践する命知らずはいなかった。

――ただ一人の貴族の令嬢を除き

祝勝会2（後書き）

話が短いですが、活動報告のコメントどおり頑張ってみましたw

祝勝会3

男性とあまり接したことがないアマリーにとってみれば、ガルーのような男に声をかけるのはとても勇気があることだった。

しかし、アマリーは声をかけた。

「あの…ガルー選手ですよ。ね？ 今大会で優勝なさった……」

それがガルーを護衛として雇う為に必要な事であり、また大会優勝者に対する礼儀であったからだ。

「ん？ ああ、俺がそうだが…。なんか用か？」

声を聞き、ガルーは少し驚いた顔で娘の方に向き直った。いきなり身なりのいい貴族らしき娘が話しかけてきて驚いたのだ。

だが、会場の中にいた他の貴族たちはガルーのその返答に少し眉をひそめた。

貴族相手に対しての言葉遣いになっていないと思ったからだ。

しかし、アマリーはそんな事はあまり気にしないのか、特に気にした様子もなく話を続けた。

「……実は、ガルー選手の折り入って頼みがありました」

「俺に？」

「はい…、えっと、あの実は……」

少し言いよどみながら次の言葉をどうやって切り出そうかと悩んでいるアマリー。その後ろでは侍女であるリースが心配そうな顔で主人の後ろ姿を見ている。

その様子に、ガルーはピンと来た。

「……まさか、俺を雇いたいとかって話か？」

他の大会参加者が貴族たちにスカウトされているのをずっと会場の長椅子で見っていたガルーは、試しに鎌をかけてみた。

すると案の上、その言葉を聞いたアマリーは驚いた顔でガルーの顔をまじまじと見た。

そして、その顔を見たガルーは少しばかり苦い顔をした。

しかし、次の瞬間には表情を引き締めて毅然とした態度をとった。

「…だったら、悪い。俺は誰にも雇われるつもりはねえんだ。他を当たってくれ」

そう言ってガルーは給仕に空になったグラスを渡してどこかに行こうとする。

相手の目的がわかったガルーはさっさと人氣が無い場所へ消えようとアマリーのほうを振り返りもせず歩き始めた。

「ま、待ってください……!」

これにアマリーは慌てて追いかけようとする。

だが、ガルーとドレスを着たアマリーとでは歩く歩幅が全く違う。距離は縮むことは無く、ただ距離が開くだけとなった。

「も、もう少しか話を……！」

その事に焦りを感じ、アマリーは急いでガルーを追いかけようとする。

しかし、その所為で普段は着慣れているはずのドレスが足に絡みついた。

「あっ……！」

アマリーは慌ててバランスをとろうとするが、足は彼女の思うように動かず、このままでは大勢の人のいる前で派手に転ぶことになる。

（だめ。転ぶっ……！）

今にも転びそうなアマリー。

しかし、それを見逃すガルーではなかった。

「……何やってんだアンタ？」

「え？」

気がつけばアマリーの体はガルーに支えられていた。

祝勝会4

「……何やってんだアンタ？」

ものすごく呆れた声でガルーは目の前のアマリーに言った。

「あ、あ、あの……！」

だが、それを言われたアマリーは返事を返すことが出来ない。

今、アマリーはガルーに正面から抱き止められる形で体を支えられているのだ。

その状況にアマリーは動揺してしまい言葉が上手く出ない。

しかし、なんとか喉から絞り出すようにして声を出し、体を支えている手を放してくれるようにガルーに頼んだ。

「て、手を放してもらえないでしょうか…！」

「いいけど。もう転ぶなよ」

それに対してガルーは小さな子供に注意するようにしてから、ゆっくりと手を放した。

『トンッ…』

アマリーが自分の足でしっかりと地面を立ったのを確認すると、ガルは腰に手を当ててアマリーに質問し始めた。

「何してんだアンタ？」

「うっ……」

「話は断ったはずだろ。なのになんで追いかけてくるんだ？」

「……………」

「…………まさか諦め切れないとか、そういう事か？」

「は、はい」

「……………」

アマリーの言葉を聞いたガルは苦虫を噛み潰したような顔になった。

ガルがアマリーの勧誘を断ったのは、恩人であるテレサに恩を返すためにこれから色々と動き始めようと思っていて、余計な仕事などとは入れるつもりがないからだ。

だが、それをアマリーにすべて説明するのはかなり時間がかかるだろうし、なにより面倒だった。

「あー……」

これはどうするか、とガル―は少し考えた結果。

ガル―はアマリーに向かって、こう言った。

「今、ガキの頃からの目的を叶えられるかもしれない大事な時なんだ。……頼むから、それを邪魔しないでくれ」

「「!？」」

その言葉を聞いた人々は驚いた。

ガル―の大会での様子や言動から、彼が人に物を頼むような殊勝な人間には見えなかったからだ。

そのガル―がアマリーに対して、邪魔をしないでくれ、と頼んでいるのだ。

これにはアマリーも面を食らった。

「あつ、あの、私は、そんなつもりでは」

今までとまるで違ったガル―の態度に動揺するアマリー。

だが、それにガル―は気づかないのかさらにダメ押しをした。

「……頼む」

軽くではあるが、間違いなくガルーが頭を下げた。

大の男が、公衆の面前で、面子もプライドも気にせず、頭に下げたのだ。

「っ……っ！」

これにアマリーは完全にやられた。

ガルーの言葉の中にあつた「目的」という言葉。

それが何のことなのかアマリーはわからなかったが、それがガルーが頭を下げている理由なのだという事はわかった。

怖いほどの強さを持ったガルーが、叶えたいと思っている目的。

その目的の為に、あんなに強いガルーが自分の面子やプライドをあつさりと捨てた。

そんな姿を見たアマリーは、ガルーの勧誘を完全に諦めるしかなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6598p/>

狼の恩返し

2011年11月10日00時45分発行